3

CASE STUDY

3-1

私たちと住まいの幸せな関係
事例にみる自由な住まいの選び方

中川寛子
（株式会社東京情報堂 代表取締役）

この7～8年、住まいと暮らし方は大きく変容してきた。その方向をざっくりまとめると、これまで常識とされてきた枠をはみ出し、打ち破り、より自由にというところだろうか。ここではそうした動きを事例から紹介する。便宜的に働き方、家族、社会との関係、住まいそのものとテーマを立てて再考するという形にしてあるが、実際の事例では変化は複数の要素を含み、絡み合っている。社会の変化がひとつの要因からのみ生ずるものではないように、住まい、暮らし方の変化もまた複雑な背景を持っているのである。

▶ 職と住の関係を再考する

Case 1

てとてと食堂

家を変えたら、人生が変わった

「家を変えたら生活が変わった」というならどこにでもある話だ。だが、てとてと食堂という、食のユニットを組む井上豪希さん、桃子さんの場合には家はそれ以上の変化をもたらした。

新居に引っ越して1年。2人は趣味だった食を仕事にすべく、会社を立ち上げ、すでに数件のプロジェクトに携わっているのである。

そのお二人の住まいは世田谷区奥沢にある築40年のマンションをリノベーションしたもの。元々はごく普通の3LDKだったが、現在は専有面積の3分の2が広いLDKになっており、中心は奥行き5mもある大きなキッチン。水回り、収納その他のプライベートな空間はリビングの壁の裏にまとめられており、個室はお二人の寝室のみ。建築家には週末にホームパーティーが楽しめる、月に1度くらい料理教室ができる家という依頼したところ、初回の3提案のうちにこの間取りが出てきたという。

いずれ必要になるかもしれない子ども部屋のことを考え、最初は驚いたという桃子さんだが、豪希さんは一目で気に入った。即決できなかった桃子さんもフレキシブルな使い方ができること、自分たちの暮らしがイメージできることからこの大胆な使い方を選択。リビングについてはスイッチプレート、棚板の厚さにまでこだわり、プライベート空間については逆に自分たちで手を入れるなど節約もして我が家を作り上げた。

家は自分たちの暮らしを表現する場

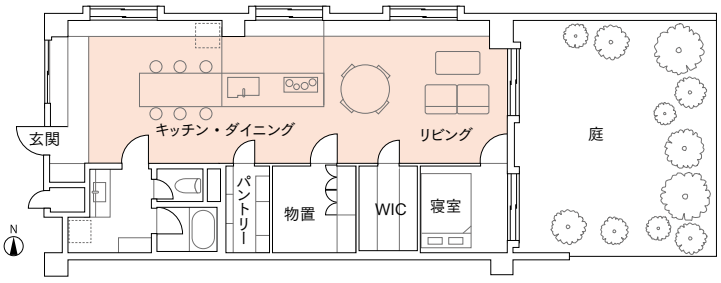
「中古でリノベという選択に両親には新築じゃなくて大丈夫？と軽く聞かれたものの、新築は与えられるものだけれど、中古は自分たちの暮らしを表現し、作っていくものだと思う。その観点でこれからどんな暮らしをしたいかを考えたら、人が集まりやすい立地、自分たちの暮らしに合わせられる空間は中古でリノベというやり方でしか実現できないという選択になったのです」と豪希さん。

桃子さんの両親も出来上がった部屋に最初はかなりびっくりしていたという。

「普通、家はクローズドなものだと思いますが、この家は空間的にも、ブログで公開しているので社会的にも半分くらい開いている状態。両親はこんなに開け過ぎていていいの？と思ったようです。でも、この1年ほど私達の活動の楽しそうな様子を見ていて、最近はこの家で良かったねと言ってくれるようになりました」。

桃子さんは横浜市で育った。特に深いご近所づきあいがあるわけでも、家に頻繁に人を呼ぶわけでもない家庭だったそうで、今の、来客はいつでもウェルカムという暮らしとは

以前の間取りと変わっていないのは玄関とトイレ、風呂の位置くらい。LDKを真ん中に玄関側、庭側に個室があった間取りを大改造、LDKが3分の1を占める部屋に。広い庭ではハーブを育て、料理に使う予定。現在整備中だ



もてなしの空間になるLDKはスイッチプレート、棚板の薄さにまでこだわったが、プライベートスペースはDIYも含め、コストを削って作った。お二人のブログにはその辺りの詳細も書かれており、参考になる

真逆だ。ご両親が不安に思うのも無理はない。だが、好奇心旺盛な桃子さんにとっては今の生活のほうが本来なのかもしれない。

一方の豪希さんは大分県で家に家族以外の誰かがいるのは当たり前という環境で育った。「その後、大学に通うため、下関で一人暮らしをしていた時も部屋に鍵を掛けたことはなく、帰宅すると誰かが昼寝しているのは日常。社会人になってからもよく後輩が料理を作って欲しいと材料を持って遊びに来たものです」。

その後、豪希さんは桃子さんの部屋に暮らすようになるが、仕事を辞めて家に引きこもっていた時期があった。豪希さんを励ましそうと桃子さんはレシピ投稿サイトへの投稿を勧めた。そのレシピを実際に作って振る舞おうとホームパーティーを開くようになったのが現在の住まいに繋がった。結婚して、もっと広くて思う存分料理ができる家に住もうと考えたからである。

知り合い7倍増、会社設立へ

ただ、今のような状態までは想像していなかったとお二人。「料理教室は月に1回程度ですが、会費制で集まる食事会は1年で100回ほど。多い時は週に3回開くこともあり、ここに住み始めてから知り合いは倍増どころか、7倍くらいに増えました。美味しいモノを囲んで楽しい会話をしていると、いろんなアイディアが出てくるし、仲良くもなる。だからでしょう、回を重ね、人間関係が広がると同時に食に関する仕事の相談、一緒に何かやりたいというケースも増え、思い切って会社を設立することになりました」と豪希さん。

それにあたって桃子さんは会社を辞めたが、決意するまでに3カ月ほど悩んだという。「我が家は学校の先生と公務員という家庭で起業、独立には縁がなく、想像できない世界。でも、この家で活動を始めてから、自分が本当にやりたい、やっていて楽しいのは人をもてなし、それを企画することだということに気づきました。それまでやっていた仕事はお金を稼ぐための手段。だとしたら好きなことをしようと決断しました」。

好きなことをするために作った家が、好きなことを仕事にする選択肢を与えてくれたのである。

会社を作ったことで家は仕事場としても使われるようになった。さらに利用者からの提案で壁を活用、展示会場としての使い方ができることも分かった。ひとつの空間が使う人と目的によって違う場になるのである。

「日本の家は昔、もっと開けていたはずですし、部屋も個別に役割を持っていたわけではなかったと思う。バブル期以降、個室を重視、住戸内を細分化してきたと聞きますが、今後はかつての姿に戻っていくのかもしれません。空間を大きく取って、自分たちでそれを意味づけして使い分ける。てとてと食堂に来る人達もあっちで本を読んでいたり、こっちで飲んでいたり、そこで喋っていたりと自由気ままに空間を使い分けています」と豪希さん。訪れる人達がこの空間にリラックスしている様子が目に浮かぶようだ。

さて、1年経ったてとてと食堂は現在も庭を作ったり、電球の位置をあちこち変えてみたりとアップデート中。家は買った時が完成ではなく、ずっと作り続けるものというのもお二人の考え。少しずつ、もっと良くなる、幸せな家である。

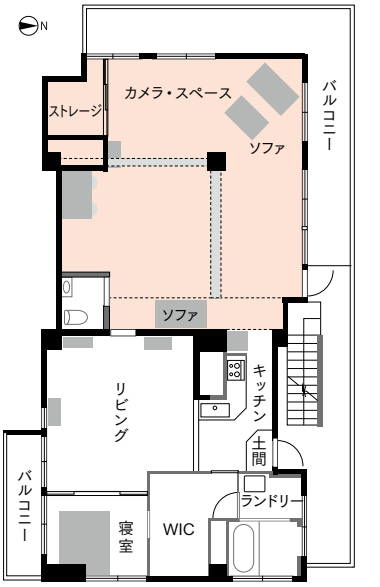
取材協力/リビタ

Case 2

職住一致を前提に家探し

田中浩子さん

モデルを入れた商品撮影などを手掛ける田中浩子さん。奥行き、高さがないと撮れないため、どうしてもスタジオが必要だったという。2戸のうち、1戸分はまるまる広いワンルーム状態のスタジオになっており、壁際に重く、高く、不定形なカメラ機材のための収納がある。リビングは既存のステンドグラスを活かしてモダンな和テイストに。バスルームには大きな窓がある



カメラマンの田中浩子さんが住宅に求めたのは職住が一致できる広さと来客に便利な立地である。

「以前住んでいた賃貸住宅のリビングは17畳ほど。その前にオフィスを別に借りていた時には全体で約46㎡。それでも高さ、重さのある機材を置くと狭く、撮影スペースが確保しにくい。加えて自宅リビングで撮影をしていると、帰宅した夫の居場所がない。来客があっても公私を分けられる家が欲しいと、広さと立地だけを条件に住まい探しを始めました」。

購入後にスケルトンにするつもりだったので、間取りには全くこだわらなかった。新築では100㎡前後の広い物件は少ないため、最初から対象外だった。

結果、見つかったのは阪急電鉄神戸本線最寄り駅から徒歩数分、築44年のマンション最上階の部屋である。元々は2戸だった部屋を二代前の所有者が管理組合に内緒で壁を抜いて一戸にしたもので、専有面積は113㎡超。十分に広さがある上に玄関も2カ所という住居兼仕事場としておあつらえ向きの間取りだった。しかも、住んでみたいと思っていたまちに立地しており、即決だったという。

「築44年のマンションを買ってリノベーションすると言ったら周囲からは『そんな古い物件にお金をかけるなんて無駄』と言われました。でも、新築マンションでは狭くてやりたいことができないし、ときめかない。といっても家を建てるまでのこだわりはなく、ローンを考えると荷が重い。ずっと賃貸のままではハコに合わせて暮らしを工夫する楽しみはあるものの、好きにいじり倒せない。そう考えるとこの決断になるわけです」。

スタジオ、住居半々の家

購入後のリノベーションは、昔からファンだったという大阪でリノベーションを手がけるアートアンドクラフトに依頼した。できあがったのは一戸分がすべてスタジオ、半分が住居という家。扉を閉めてしまえば住居とスタジオは完全に別れるようになっているが、2カ所の扉を通じて全体を回遊することもできる、使い勝手を考えた間取りである。

洋室のあった窓辺に風呂を持ってくるなど大胆なリノベーションの一方でリビングには障子を入れるなど、既存のステンドグラスを活かしたモダンさのある和のインテリアにしてもらった。

「古い建物には新築にはない面白みがあります。新築ならステンドグラスは入れないだろうし、部屋をとり囲むほどの巨大なバルコニーも自分なら作らない。でも、せっかくあるのだから、その古さで楽しんで遊びたい。そもそも、この物件はつい最近、管理会社が入ったくらいで、自治会も緩い感じ。各戸の

扉、門扉は住んでいる人がそれぞれ自由に好きなものを付けていますし、2つある階段のうち、なぜか、ひとつは我が家には通じていない。不思議だらけで非効率ですが、だから面白いんです」。

ところでひとつ大きな、誤算があった。住宅を購入、設計が終わっていよいよ工事に入るというタイミングで妊娠が分かったのである。2人で住むつもりでいたため、住居部分にはリビング、寝室と大きなウォークインクロゼットと水回だけりしか用意していなかった。子ども部屋はまったく想定していなかったのである。

「どうしようと思いましたが、まあ、いいかと。そもそも、将来のことは誰にも分かりません。このまま、仕事を続けているかもしれないし、辞めちゃって違う仕事をしているかもしれない。でも、広い空間さえあればなんとでもなる。それでそのまま、当初の予定通りのリノベーションを行いました」。

子ども部屋がいるから●LDK 必要という声をよく聞くが、広さ自体があれば後でなんとでもなる。仕切られた部屋を広げるより、広い部屋を後から仕切るほうがおそらく簡単でもあるはず。おおらかな意見に賛成したい。

取材協力 / アートアンドクラフト

Case 3

アートアンドクラフト

場所、時間を自由裁量。フリーハンドという働き方

考えてみると住まいと職場が分離されるようになったのは戦後の高度経済成長期以降である。それまでは商売をする人達はもちろん、会社に勤めている人でもさほどに職住は離れてはいなかった。その後、都心に職場、郊外に住宅を配し、働く人と家庭を支える人を分離するという方式が効率を高めると、職住は遠くなっていったが、今、そのやり方に疑義が呈され、新しい働き方が模索されている。

たとえば大阪のリノベーション会社アートアンドクラフトは2017年4月から働く場所、時間を自由に裁量できる働き方を導入した。名付けてフリーハンド。もっと効率的に、生産的に仕事するための取組みだという。

「以前から設計スタッフは社内で仕事をする必要がないため、在宅で仕事をしていましたが、それを営業も含め、全社的に自由にしようというのがこの試み。といっても会社に誰もいないのも困るので、半年ほどかけてルールを作り、テレビ会議や会社の様子をスマホで見られる仕組みその他のネットワークを構築しました」。

開始から1年。ちょっとした質問にわざわざ電話をする必要があるなどささいな不便を除けば問題はありません、と広報担当の土中萌さん。

「子どもと過ごす時間が増えたという男性スタッフがいたり、病気の時に助かる、通勤しなくて済んでラクなどと好評です。これからはこの制度に合わせて家の中にワークスペースを作ったり、住む場所を変える人なども出てくるのではないかと思っています」。

土中さん自身も引っ越しを考えているそうで、現在検討しているのは神戸市の垂水区。大阪市内勤務を前提にするとちょっと遠い気がするが、毎日同じ時間に通勤しなくて済むとなれば多少遠くてもかまわない。

「京都郊外や、もっと遠く、和歌山などでもいいかといろいろ妄想しています。家賃が安い場所なら2軒借りるという手も。働き方が変わり、通勤が不要になれば、郊外居住はもちろん、一人が複数の家に住むこともできるわけで、そうなれば空き家はもちろん、過疎化も解消されるかもしれませんね」。

通勤という条件がひとつ外されるだけで、住む場所は自由に選べるようになるわけだ。場所だけではない、時間が自由になることで、子育てや介護をしている人、外に出にくい障害者、高齢者なども働けるようになる。また、住宅内に働く場が入ってくることで住まいに求められる形、機能も変わっていくかもしれない。だが、これだけメリットがあるように見えるフリーハンドな働き方を全社的に導入している会社はさほど多くはない。

「30人ほどの会社で互いの仕事が見えていること、自分の仕事が好きでやりがいを感じているからできていることだと思っています。やりたくない仕事なら監視がないとやらなくなるかもしれませんし、大きな会社だと互いの仕事が見えず、評価しにくいと考えるかもしれません。長時間労働が偉いと考える会社でも難しいでしょうね」。

働き方が先か、住まいが先かは鶏と卵のようだが、いずれかが変われば、もう一方も変わる。これまであまり意識されてこなかったが、住まいと働き方は表裏一体なのである。

同社がやっていること、考えていることを伝えるために作られているフリーペーパー

Case 4

THE6（ザ・シックス）

シェアオフィス利用権付住宅

賃貸住宅ではここ数年ほどの間に仕事と暮らしをセットにして考えた物件が少なからず登場している。このページではいくつか、そうした事業者からの提案がある物件をご紹介したい。

まずは宮城県仙台市にあるシェア型複合施設「THE6」である。2013年に仙台でリノベーションなどを手がけるエコラが取得した時点で築36年という住宅を併設したオフィスビルで、当時は1～3階のオフィス、上階住戸の14室中5室が空室という状態だった。当初は空室を埋めることに専念、その次に同社が考えたのは3階をシェアオフィスにし、上階住戸にその利用権を付加した、職住一体型の複合施設だ。

物件名は暮らす、働くに加え第三の居場所があるという意味で1st place＋2nd place＋3rd placeでTHE6。住宅はSOHOとしても使えるよう、室内に箱を入れたような構造となっており、会議その他で必要があれば3階を利用することに。起業時の資金の不足しがちな時期に住宅、オフィスをそれぞれ借りるより、ひとつで双方を兼ねられれば創業支援にもなる仕組みだ。

3階のシェアオフィスには壁で仕切られたスモールオフィスのほか、大きなキッチンを備えたイベントスペースにもなる広いフリーデスクがあり、その場を利用して頻繁にイベントなども開かれている。キッチンを利用した集まりも多く、そのため、普通はシェアオフィスには縁のない高校生や年代の高い女性なども来訪。多世代が交わる場となっている。

2011年以降仙台では起業する人が増加、シェアハウス自体はあるものの、起業家が連携できる場がなかったというが、この施設ができたことで人が集まりやすくなった。フリーデスクを除いては満室となっており、ニーズの高さが伺えるというものだ

Case 5

ジョンソンタウン

住みながら店を開く、職住一致できる平屋

埼玉県入間市にあるジョンソンタウンは戦後、米軍基地周辺に多く建てられた米軍ハウスを中心に作られた一戸建て住宅地。基地返還に伴い、一時はスラム化していたが、2003年からオーナーである磯野商会が10年をかけて米軍ハウスを改修。外観イメージを統一した平成ハウスと呼ばれる住宅を35棟建設し、一帯を他にない住宅地として再生させてきた。

特徴は立地によるが、自宅で営業できること。現在ではカフェ、クリニックに雑貨店、スタジオなど様々な業種が60店近く開業している。自宅で仕事をするクリエイティブ系住民も多く、ここでは職住一致はごく当たり前である。

その背景にはターミナル池袋から急行利用でも約40分、最寄り駅から徒歩15分という立地がある。通勤を前提とするとやや不利、であれば自宅で仕事ができるようにするという発想なのだ。独特の雰囲気もあってこの作戦は見事に成功。特に米軍ハウスは空き待ちもあるほどの人気という。

加えてここでは日本でDIYという言葉が一般化する以前から、DIYは当然とされてきたし、大型犬飼育も問題なし。住民間の顔が見える関係を大事にしたいとタウン内には柵はなく、テラスを介して会話もある。バリアフリー化、見守り可能なセキュリティシステム導入など、このまちは住まいと仕事の関係以外の面からも「賃貸かくあるもの」という常識を超えている。住み続けたい人がいるのも分かろうというものだ。

以前は磯野住宅と呼ばれていた一画だが、2009年にかつてこの地にあったジョンソン基地の名からジョンソンタウンと名称を変更。独自の景観が評価され、2015年には都市景観大賞のうち、都市空間部門大賞を受賞するなどしている

Case 6

大森ロッヂ「運ぶ家」

借主と協働する、新しい店舗付き住宅

店舗付き住宅は昔から商店街などによくある形態である。1階に店舗、2階以上に住宅というものだが、その進化形が品川区内、京浜急行線大森町駅近くにある大森ロッヂ「運ぶ家」だ。

大森ロッヂは築40年以上の長屋、一戸建てを順次改装して生まれた一画で雰囲気のある大和塀に囲まれた敷地内には入居者の共用空間として使える東屋、ギャラリー、広場などが作られている。良好な人間関係もあいまって人気の賃貸物件だが、「運ぶ家」はそこに新築された木造3階建て2戸からなる住宅。

これまでの店舗付き住宅と大きく異なるのは入居者が先に決まり、その意見を反映して建物が建てられていること。店舗付き住宅でなくとも、これまでの賃貸住宅はすべて先に建物、その後に入居者だったが、そうではない作り方が生まれているのである。特に店舗ではどのような作りをされているかは売上に直結するだけに大きな変革と言える。

2015年の竣工後に開かれた見学会で配られた資料の中でオーナーである矢野一郎さんは以下のように思いを書いている。働き方と住まいというテーマそのものとは少し離れるが、住宅の変化をご紹介するという意味で引用したい。

「『買う』か『借りる』かの二元論を超える住まいのあり方を提案しています。入居者、施主、設計者が計画当初よりプロジェクトに当事者として参加することにより、入居者と施主が実現したいことを互いによく理解することができます。賃貸借契約上の賃借人という立場であっても新築の理想の住まいや店舗を得る可能性を、また賃貸人の立場からは単なる賃借人の確保ではなく、その事業のよき理解者を得る可能性を示すものと思います。竣工後も、入居者と施主が互いによきパートナーとして協力していけるものと感じています」。

大森ロッヂでは入居者間のコミュニケーションが住む魅力のひとつとなっており、空室が出ても入居者の友人知人などですぐに埋まるとか。「運ぶ家」もいわば関係者が入居を希望。オーナーとともに設計などに参加、一緒に作り上げてきた

Case 7

蒲生WAnest（がもうワネスト）

自宅で仕事、趣味を生かした暮らしを実現

埼玉県越谷市蒲生にある2階建ての木造集合住宅蒲生WAnestは広い中庭に面して趣味室と名づけられた空間があるのが特徴の物件だ。

趣味室は住居部分とは水回りなどを介して独立して使えるように配置されており、仕事場や趣味の空間、その作品を展示するなどに使いやすいようになっている。防音室があるタイプでは自宅で教室を開くことも可能だ。

また、建物内には大小サイズの異なる4つのレンタルスペースがあり、これを使ってセミナーや各種講座などを開くこともできるようになっている。入口内のカフェは元々集会室として作られたものだが、日替わりで飲食店をやってみたい人のチャレンジの場ともなっているとか。起業にまではまだ踏み切れないものの、トライアルしてみたい人にチャンスのある住まいというわけである。

加えて緑の豊富な広い中庭、雨水利用や屋上緑化、その他環境に配慮した作りなども話題になり、竣工後はわざわざ都市から移り住む人が多かった。長らく、賃貸では利便性や見た目のデザインなどが重視されるとされてきたが、それ以外の要素にも目が向き始めているのである。

都心で探していた人が下見に訪れて決めてしまったという例も多い蒲生WAnest。敷地全体に漂うゆったりした感じは郊外ならでは。駐車場も緑に覆われているなど都心では考えられない環境だ

Case 8

次世代下宿「京都ソリデール事業」その他

ひとつ屋根の下に高齢者と学生が同居

ひとつ屋根の下に住むのは家族だけというのがここ数十年間の暗黙の了解であったと思う。だが、このところ、ひとつ屋根の下に家族以外が集まって住むケースが増えている。そのひとつとして、模索が続けられているのが高齢者と学生の同居というパターンである。

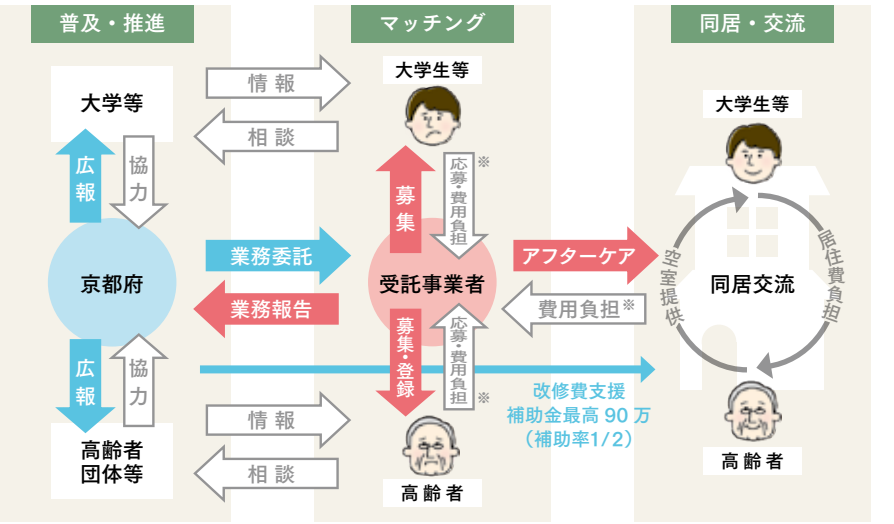
この動きのきっかけとなったのは2003年のフランスでのかつてない猛暑。普段エアコンを必要としないフランスではこの時に一人暮らしの高齢者が多く亡くなった。その痛ましい経験を経て、パリやリヨンなどで独居の老人宅に住まいを探す若者を同居させ、高齢者を自然に支えようという仕組みが生まれた。同居する若者にも家賃を安くできるというメリットもあり、2004年に最も早く始まったパリでは年間350組もの同居例が出ている。フランス以外でもスペイン、ドイツ、カナダなどで似たような取組みが行われており、世界的なホームシェアのネットワーク組織もある。

福井大学で行われている高齢者と学生の同居を紹介するパンフレット。実践が続けられている

2018年度の受託事業者は5社。うち、4社が京都市内、1社は京都市内と宇治市、向日市、長岡京市、大山崎町内を、1社が福知山市をカバーしている。現時点では高齢者、学生の費用負担はない

事業実施体制スキーム図

平成 29 年度次世代下宿「京都ソリデール」事業



※：平成 29 年度は無料

［出典］『次世代下宿「京都ソリデール」事業概要』（京都府住宅課）より作成
http://www.pref.kyoto.jp/jutaku/documents/jigyogaiyo_1711~.pdf

それに影響を受け、日本でもいくつかの取組みが始まっている。たとえば福井大学住環境計画研究室では研究の一環として「たすかりす。」という名称で2013年から異世代同居を試みている。東京でも文京区でまちづくりに取り組むNPO法人街ing本郷が「ひとつ屋根の下プロジェクト」として2014年から手がけているが、いずれも思うように受入高齢者宅、同居学生を増やせていないのが実情だ。

京都府が事例を重ねている要因は？

そんな中で2015年度から事例調査を始め、2016年度以降実際の異世代同居のマッチングを始めた京都府が実績を上げている。同年度には4組、2017年度には3組が同居を始め、2018年度には対象地域を京都市外へも拡大、ひとり親世帯などの学生がこの制度を利用する際には下宿代を支援するなどしているのである。

他の事例と大きく異なるのは行政主導に加え、それぞれに異なるノウハウ、ネットワークを持つ事業者が事業を受託、連携していることだ。高齢者にネットワークを持つ京都高齢者生協くらしコープ、地域活性化に関心のある学生をネットワーク、長年地域に入る活動を続けてきた応用芸術研究所、シェアハウス運営にノウハウのある不動産会社addSPAICEなどが相談会を頻繁に開くなどして希望者を集め、情報交換も行っているのだ。多くない成功や失敗の経験を共有し、活かすためである。

「これまでの下宿人とはノートでの連絡はしていたものの会話はほとんどなかった」と石田さん。山田さんとは会話はもちろん、一緒に夕食をとったり、家事の手伝いを頼んだりと互いに楽しい関係を築けているそうだ

そうした苦労の甲斐あって下宿させてもいいという高齢者は少しずつ出てきているものの、そこからが大変と京都府建設交通部住宅課の和田豊一氏。

「問合せのあった方にご説明すると、ご飯はどうすれば良いだろう、夜中の出入りや生活時間帯のずれが気になるなどと細かいことが不安になり始め、結局やはり難しいですかねという結論になることもあります。学生には家賃が安くなることもメリットですが、大家さんとしては損してまではやれないという方も。現状、貸しても良い人は一定数集まっていますが、通学のための立地と家賃、相方の相性などを考えると、もっと増やす必要があります」。

難しいのは条件のマッチングだけでは済まない点にもある。同居を開始する前に互いを知るために高齢者宅でしばらく時間を過ごした際に、水を流しっ放しで食器を洗うのが気になる、醤油の好みが異なるなどささいな生活文化面のずれからマッチングに至らないケースもあるそうで、他人同士のマッチングは想像以上に難事業なのだ。

そうしたハードルを乗り越え、2017年10月から同居をしているお宅を訪ねた。

一人暮らしの寂しさ、不安を解消

高齢者はかって市立高校の教師だったという81歳の石田進さん。10年ほど前に妻が亡くなり、その後、新聞で見かけた独居男性の孤独死が気になり、何かあってもすぐに発見してもらえるようにと下宿人を置くようになった。

「年金ももらっており、経済的には困らないけれど、一人息子と孫たちは東京だし、親戚もほとんど亡くなってしまい、一人暮らしは言葉にいえないほどしみじみ寂しい。下宿人とは特に会話があるわけではない。そこでたまたま見かけた次世代下宿「京都ソリデール」事業に惹かれ、話を聞きに行ったのがきっかけ。あわせて同事業で不用品の処分もしてもらいました」。

同居しているのは公共政策を学ぶ京都府立大学2年生の山田茉桜さん。実家のある奈良県内から2時間近くかけての通学が辛く、下宿したいと思っていたものの、親は経済面で大変と反対。3万円以下でなんとかならないかと探していたところに京都ソリデールに出会った。

「応用芸術研究所の活動拠点で高齢者と学生の交流会があり、そこでお目にかかりました。長らくネパール支援のボランティアをされており、博識。話を聞くのは楽しいです。実家のマンションに比べると一戸建ては寒くて大変ですが、初めてやる、できていない家事にも怒られることなく快適。最近は本を見て作った料理を分けていただくこともあり、友達からは羨ましがられます」。

だが、羨ましいと言いつつ、自分には無理という友人も多いという。

「家に知らない人がいるのは無理という人もいるし、外の自分と内の自分を分けている人にも無理じゃないかと思います」。

かく言う本人は他人を気にしない、オープンな性格と思っていたが、石田さん宅で暮らし始めて、階下の風呂に人がいる気配に下りて行きたくないことがある自分に気づいて驚いたという。

「その時によって他人が気にならない時もあれば、すごく気になる時も。人の気持ちには波があることが分かりました」。

高齢者の体調を思いやれるようにもなった。「石田さんから足がふらつく、モノが二重に見える時があって、そこにバスが来ると怖いなどと体調の話をよく聞くのですが、だんだん、それが想像できるようになりました。以前だったら、前をゆっくり歩くお年寄りに内心いらっとしていましたが、今は大丈夫かなと気になります」。

一方の石田さんは山田さんが手伝ってくれる高所の掃除や電球交換といったなんでもないことに感謝、この制度は高齢者にも学生にも貢献できると評価する。自由な一人暮らしに比べると不便もあるが、メリットもある、互いにそう考えている。

多世代交流、多機能賃貸住宅

地域の人が集えるラウンジや工房など会員制のコモンスペースを持った賃貸住宅、荻窪家族レジデンスは日常の中で多様な人が交わり、自然に関係が生まれ、支えあうことを目指している。その発想が生まれたのは荻窪家族プロジェクト代表である瑠璃川正子さんの10年に及ぶ両親、義両親の介護の経験から。

特別養護老人ホームなどを経て病院で亡くなった義父母の姿からは施設と家族で暮らす自宅との違いを考えさせられた。自宅で介護、看取りをした実父母からは最期まで家族で暮らすことの大変さを実感した。瑠璃川さんは「自由のない施設では暮らしたくはないが、これからの家族だけでは親の面倒をみられない時代には地域や友人と繋がり、自立しながら助け合う暮らしが必要ではないか」と考えたのだ。

ただ、それを住宅として形にするまでには長い時間がかかった。「高齢者、障害者、ペットなども含め、子育て世代やシングルなど、幅広い年代の男女が共に暮らせるような場を作りたい」。言葉にすれば簡単だが、瑠璃川さんがこの住宅を考え始めた2000年頃は今よりももっと行政の施策が縦割り。高齢者、子育て支援はそれぞれ別物であり、高齢者が住む住宅といえばサービス付き高齢者住宅とされ、一般の住宅以上に厳しい条件が付けられた。

そうした紆余曲折を経て荻窪家族レジデンスが完成したのは2015年春。いまだに既存の枠に入りきらない難しさを抱えている。

「小さな専用居住スペースで人間関係が近くなるため、下見してすぐ入居というわけにはいかない。障害を持つ方が入居する際は、共用スペースでのイベントに参加してもらったり、こちらが職場を見学したりと、お互いが納得するまでに半年ほどかかった。こうしたやり方だと、不動産会社には興味を持ってもらいにくい。高齢者住宅のつもりで来る人は何をやってもらえるのかにしか関心がなく、主体的に支え合うという考えを理解してくれません」。

瑠璃川さんと取材日当日の番頭さん、高橋明子さん。この日は「ふらっとお茶会」が開かれ、男女合わせて10名ほどが集まった。個性的な建物の入り口に当日のイベントの告知が掲示されている

自然に広がる手助けの輪

それでも、荻窪家族レジデンス内外では人の輪が広がり、繋がりつつある。瑠璃川さんと3人の入居者女性は朝7時半に女子会と称してその日のスケジュールを確認し合い、具合の悪い人がいれば「ご飯を食べに来てよ」と誘うことも。瑠璃川さんは寝たきりの入居者の部屋のブラインドを開けに行ったり、往診に立ち会ったりと、こまめに入居者の様子を確認もしている。もちろん、入居者は高齢者ばかりではない。

地域に開放しているのが1階の共用スペースだ。医療や健康その他の困りごとを相談する「荻窪暮らしの保健室」、お茶を飲んで話し合う「ふらっとお茶会」などの定期・不定期の集いには、ご近所だけでなく、遠方からも人がやってくる。季節ごとにご近所の先輩主婦らと一緒におはぎ作りやらっきょう漬けをすることも。そうした気取りのない集まりから、それまで付き合いのなかった人たちに繋がりが生まれているのだという。

瑠璃川さんの居場所づくりに共感した番頭さんと呼ばれるご近所のボランティア5人が日替わりで管理事務所に通ってくる。朝の清掃をはじめ来訪者への対応、イベントの企画などを担ってくれている。瑠璃川さんの「多世代同居、交流の住まい作り」は少しずつ進行しているようだ。

Case10

みかんハウス

ファミリーも住む、信頼関係重視のシェアハウス

地域の人も利用できるキッチンは外からも出入りできるようになっている。子どものいるファミリーがいることから、子ども関係の書籍が増え、階段手摺には転落防止用の柵が設けられていた

今では一般的になったシェアハウスが登場し始めたのは2000年前後から。シェアハウスポータルのひつじ不動産の調査では2006年以降に激増、現在に至っている。時代を考えるとバブル崩壊後に安価な住まいとして注目され、東日本大震災後に人との繋がりを求める人によって一般化したと考えるのが妥当だろう。当初は若い単身者中心だったものの、その後は多様化が進んでいる。

だが、意外に少ないのがファミリー世帯向けのシェアハウスである。一般にファミリーと単身者の共生は難しいと言われる。音や生活時間帯の違いなどがトラブルになりやすいからだ。そんな中、千葉県松戸市にあるみかんハウスでは赤ちゃん2人を含むファミリー3世帯と単身女性4人が共生している。

同物件は大学で経済学を教える川西諭さんが親族所有の老朽化した賃貸戸建て建替えに当たって企画したもの。年齢の異なる人とのコミュニケーションが苦手な学生が多いことが気になっていた川西さんはどうせ建替えるなら同世代だけが集まるタコツボのようなアパートではなく、多世代が住み、それぞれが他の居住者と触れ合うことができる住まいにしようと考えた。

シェアハウスにしたのは川西さん自身がイギリスで居住した経験があり、経済的で合理的と評価していたため。ただし、実際には一般の賃貸同様にキッチン、水回りを備えた、ファミリーにも住みやすい住戸も作られている。

実際、居住者は前述した通り、混在しているが、入居者間にコミュニケーションがあるためか、トラブルは特にないと川西さん。世の通説は意外に問題にならないのだ。だが、違う点での難しさがあるという。

「共用部が広いので、そこに知らない人がいるだけで不安。安心して住むためには互いに信頼関係を作っていくことが大事ですが、そこが難しい。家族であれば根っこで信じている部分がありますが、他人とはそれがないところからスタートする。しかも人によって他人への信頼感の持ち方が異なる。ルールも同じで何かしらのルールを作らないと共同生活は成り立たない。一方、ルールを厳しくし過ぎると息苦しい。そこで寛容その他、いくつか心がけていただきたいことをこの住宅での暮らし方のルールとしてまとめ、入居を希望する人には読んでいただき、面接ではお願いもする。それを重ねて、現在、ようやく良い状態になってきました」。

かつては短期の入居が中心だったが、最近では長く住みたいという人も増えているのがその証左。他人同士が気持ちよく同居するには陰で大変な努力が必要なわけである。だが、そこに学ぶことは多いと川西さん。「多世代で暮らす、ほど良い距離を置くなどの経験には社会を変える可能性があると思っています。互いに上手な関わり方ができるようになれば無用なトラブルも起きなくなるのではないでしょうか」。

みんなが笑顔になるための

みかんハウス　暮らし方のルール

入居希望者にお願いしている4つのこと

入居者のみなさんにみかんハウスで楽しく安心して暮らしていただくためには、住環境保全が大事です。

お願いしたいこと

お互いのことを大事にする気持ち

お互いのことを理解しようとする気持ち

入居希望者には現地来訪の前に暮らし方のルールを送り、読んでもらうようにしている。この時点で7割ほどは検討を止めるようですと川西さん。基本的な考え方があまりにかけ離れている人とだと共同生活は難しいということだろう

Case11

MANA HOUSE 上用賀

シングルマザー向けシェアハウス

数自体は多くはないが、このところ目立って増えているのがシングルマザー向けシェアハウスだ。2017年6月に東京都世田谷区にオープンしたシングルマザー向けシェアハウスMANA HOUSE 上用賀もそのひとつ。

駅から15分ほど歩く物件周辺は広い一戸建てが中心で空き家と思しき住宅も点在している。利便性を重視する最近の住宅市場では郊外の、駅から遠い、核家族には広すぎる住宅は使われなくなることも多いのだ。

MANA HOUSEは広さを活かし、シェアハウスには珍しく狭い部屋でも7.5畳、広い部屋になると10畳という個室を用意。母子3人でもゆったり暮らせる住まいになっている。

また、1階の20数畳ほどもあるリビングは入居者の共用スペースであると同時に地域食堂としても開放されている。平日の夜は食事が提供されているのだが、子ども達は地域の親世代の人たちや同物件を応援しているサロン会員の人たちなどと一緒に多世代、大人数の食卓と囲むことになる。孤食をなくすだけでなく、他年代の子ども、多世代の大人と繋がる仕組みだという。

このリビングでは季節に応じたイベントも開催されており、そこではいつも関わることが少ない男性も多く手伝いに来る。母子家庭で育った子ども達は接する機会が少ないため、大人の男性が苦手になることがあるというが、それを防ぐ意味合いもある。

子どもの笑顔が増える家

加えてMANA HOUSEには昼間から夜にかけて誰かがいる。火曜日を除く平日の13時～15時には保育士・幼稚園教員として30年のキャリアを持つ関野紅子さんが、それ以降の時間はご近所に住むシニアを中心としたスタッフが夜9時まで常駐。子どもを迎え、見守る。こうした孤独を防ぎ、多くの人と触れ合う体制が功を奏してか、入居前より落ち着きを取り戻し、笑顔の増える子どももいるという。

子どもたちの幸せの背景にはもうひとつ、ママたちが同じ境遇の人たちと暮らし、共感しあえることで得た精神的な安定がある。夫婦で子育てしていてさえ、共働きの女性は仕事、育児、家事の板挟みになりがち。それをひとりで引き受け、しかも罪悪感から、自分が父親役も母親役もやらなくてはいけないと思いつめ、自分が倒れたらどうなるのだろうと不安を抱える。そんな母親の精神状況が子どもに影響を与えないはずはない。逆にその点をクリアできれば、母の幸せは子に伝わり、母子はハッピーでいられるのである。

子どもの幸せ最優先で仕組みを考えたという運営者の山中真奈さんは「繋がりが不足している人は不安になりがち。不動産会社はずっと住まいという箱だけを提供してきたけれど、ここは繋がりが生まれる機会も提供しています。ただ、関係を家族と考えるのはちょっと違う。家族では近過ぎて、互いを傷つけあうことも。ここでの関係は少し距離のある親戚が良いのかなと思っています」。

家族は近すぎるという言葉は含蓄に富んでいる。MANA HOUSEでは前項のみかんハウス同様、入居の心得なる文書を作っているが、そこには入居者同士は他人であり、無理にずっと一緒に居ようとしなくても良い、干渉し過ぎないなどと書かれている。他人が共同生活を営むのだから当然ではあるが、これを家族間、夫婦間で考えるとどうだろう。ひとつ屋根の下の他人同士の暮らしは家族にも参考になる気がする。

２階にもキッチンがあり、玄関、収納もたっぷり。リビングで開かれるイベントでは子ども達が料理やケーキを作るなどの試みも。季節ごとのイベントにはこの活動を支援する外部の人たちが手伝いに来て賑やかな場になる

Case12

河本ここのさん

シェアハウス利用で住み方を変え、家族を再生

湘南の高台に建つ、眺望がすばらしい河本さんのセカンドハウス。滞在している人たちはもちろん、外からいろいろな人が参加してのイベントなども開催されている。地域との付き合いも増えたという

家庭第一でできる範囲で仕事をしてきた河本ここのさんが文京区にある自宅と湘南のシェアハウスで二拠点居住を始めたのは2014年。以前から湘南で暮らしたいと思っていたものの、賃料に家具一式を揃えと考えると、時短で働く身では手が出ない。そこに友人のアドバイスがあった。「シェアハウスに住んだらいいんじゃない」。シェアハウスなら身の回りの品さえ持ち込めば安価に、すぐ生活が始められる。早速、友人の知り合いが運営するシェアハウスを見学、入居を決めた。 家族に話すと、あっさりいいんじゃないという返事。だが、家事全般を担う母がいなくなるという意味を理解しているわけではないようだった。旅行であれば帰宅後の溜まった洗濯を片付けるのもやむなしと受け入れてきた河本さんだが、今回は湘南で生活するのである。家事は東京にいる夫、息子、娘の３人で回して欲しい。河本さんは話し合いをしようと家族に呼びかけた。

その時、主導権を取ってくれたのが夫だった。結果、３人は洗濯、掃除、炊事と日によって分担することとなった。ある意味、東京の家もシェアハウス状態になったわけだ。

「その数年前の離婚危機を考えると驚きの変化です。というのは長らく夫は家庭に無関心。私はまるで空気のような存在になっており、子どもの教育その他相談する相手がいない。そんな中で東日本大震災が起き、その翌日、夫は遊びで名古屋にゴルフに。その時、もう離婚してもいいだろうと思いました。それまではなんとか関係を修復しようとアプローチはしていたのですが、それもすっぱり止め、完全に無関心になった。頑張ってきたのになぜこうなってしまったのかという思いで、他の出来事も含めて考えるうちに、次第に自分にも問題があるのでは？と感じ始めました。自分自身に向き合い、学ぶうちに自分自身の囚われに気づくようになりました。一方、夫も悩みながら家族についての学ぶ機会を得ていて、自分が家族に対してできることは何かを主体的に考えていたようです」。

シェアハウスでの暮らしはお互いが自分自身に向きあってきたからこそ、引き寄せた流れだったのかもしれない。

その後、思わぬ物件との出会いがあった。入居していたシェアハウスのオーナーが開いた不動産投資セミナーでこれから生活していく手段として不動産という手を知り、見に行った土地が気にいったのだ。

だが、自分一人の収入では必要額のローンが組めない。河本さんは歯がゆさを感じながらも夫に相談した。以前の夫だったら断られていただろうが、返事は快諾。そこから自分たちのセカンドハウスであり、様々な人たちが滞在できる家を目指して建設が始まった。

夫婦で取り組む家作りは楽しかった

「考えてみると文京区の家も18年前に自分で建てたもの。でも、その時は夫は何も口を出さず、私が一人ですべてを決めざるを得なかった。せっかく家を建てるというのに楽しくもなんともなく、家にも愛着はありません。ところが今回は共同作業。どんな暮らしをしたいのかを一緒に考え、形にしていくプロセス自体が楽しく、できあがった家はとても思い入れの深いものになりました」。

親子関係にも変化が生まれた。「シェアハウス暮らしを始めた時、息子は浪人中。一度失敗しているだけに、どこに入って欲しいなどという執着がありましたが、自分がやりたいことをやると決めた途端にあなたも好きなことをしなさいと思えるようになりました。あれしちゃだめ、これをしてはいけないと自分を縛っていた紐を切ると、他人を束縛していた紐も切れると思いました。自分の思い込みや囚われを手放した時に手の中にあるものが幸せなのかもしれません」と河本さん。

現在は夫ともどもに二拠点暮らしを実践。湘南ではかつての彼女同様、人生に悩む人達を共に「拡大家族」として暮らす場を提供、VisionQuestというコミュニティを運営している。

撮影 / 黒羽俊之

Case 13

近藤ヒデノリさん

我が家を開く、シェアする、自分で作る

「家を開く」という言葉を聞くようになった。クローズドな家族だけの場所から地域、社会にオープンな、人が集まる場としての住まいと言えば良いだろうか。世田谷区の近藤ヒデノリさんの自宅はまさにそんな場所だ。

舞台は玄関脇の階段を下りた先にある地下室、高い吹き抜けのあるリビング。アートや陶芸などの展示、音楽演奏や映画上映、食事会や各種ワークショップその他実に多種多様なイベントが開かれ、人が集まる。海外からの旅行者が宿泊することもあり、空間は実に多機能に多くの人に使われている。

だが、近藤さんが家を建てようと考え始めた時点でのイメージはもっと曖昧なものだった。「友人の建築事務所でオープンスペースをギャラリーにしてイベントを開催しているのがいいなと思ったり、本屋兼カフェギャラリーをやってみたいとか、人の集まれる文化的な場が欲しいとは思っていたのですが、具体的ではなかった。ところがある晩、自宅をそういう場所にしようとネットで本格的に調べるうちに、世田谷区が推進する「地域共生のいえ」制度や「住み開き」事例も知り、確信に変わった感じでした」。

家を建てた土地は元々は彫刻家だった曾祖父の自宅兼アトリエで、往時は様々な人が出入りしていた。その土地に建てるなら自分が住むだけではなく、多くの人がアートに触れ合えるような場にしようと考えたという。

子どもに斜めの関係を作る

核家族は風通しが悪いという考えもあった。「我が家は親と子一人。学校も加えて考えても人間関係は縦と横。そこに多様な年代と触れ合う場を作ることで斜めの関係を作ろうと思いました。様々な生き方、働き方をする大人たちとの斜めの関係があれば、何か問題を抱えた時の救いになり、ロールモデルを得ることになるのではと考えました」。

そのため、近藤さん宅は家を開いているだけでなく、ルームメイトが住んでもいる。以前住んでいたNYでシェアハウスを経験して以来、ずっとルームメイトがいる暮らしをしているのだという。もうひとつ、NYでの経験が生きていることがある。セルフビルドだ。

「人が集まる場として地下室を作るとなると予算が厳しい。そこで内装は引っ越してから自分たちでやることに。引っ越し時点では床は貼られておらず、トイレの壁もない

人目を惹く外観に高い吹き抜けのあるリビング、地下室に離れのようになった仕事部屋、その上階にある茶室のような空間など、近藤さん宅の作りは縦横に複雑で言葉ではなかなか説明しにくい。ただ、開放的で非常に居心地が良い。特にリビングは陽光に直面するように作られており、温かく、明るい

この家を建てている時にパーマカルチャーに出会い、書籍まで作った近藤さん。海外ではエアコンがいらないどころか、自然エネルギーをもっと無駄なく使う住宅が実際に作られているそうだ。長く住むという意識からか、地元にコミットすることが増え、まちを手作りしようと様々な活動に関わっている

状態で、そこから友人やご近所さんのべ100人くらいに手伝ってもらい整えてきました」。

その後の庭作りも含め、子どもにも手伝わせた。仕組みを教えたい、自分で作れば自分で直せることを教えたいという考えからだ。家は誰かが作ってくれるものと考えるのが一般的だが、近藤さんにとっては自分で作り上げるものなのである。

費用節約のためのもうひとつのアイディアが廃材利用だ。青梅市で廃業した材木店、三重県の山で不揃いだからと使われずにいた材木を安く買い、それを内外装に使ったのだ。人目を惹く木の外観は廃材利用から生まれたデザイン。床のフローリングが不揃いなのもそのためだが、新築にも関わらず、味があるのは手作業ならではだ。

ここまでだけでも近藤さん宅が一般的な住宅の作り方、使い方とかなり異なっていることが分かるが、これだけではない。リビング上階には仕事部屋があり、出勤しない時にはそこで仕事をするという。住宅そのものは太陽の暖気、地下室の冷気などを利用、循環させることでエアコン不要の仕組みとなっており、リビングが土地に対し斜めになっているのは陽光を最大に取り入れるため等々聞けば聞くほど、常識に捉われない家なのである。使い方も融通無碍で開きたい時には開くが、そうでない日もあるなど常に自分が主体。日本では家に合わせて暮らしを考える人が多かったように思うが、衣食住のうち、そんなやり方をしているのは住だけ。近藤さん同様もっと自由になっても良いのではなかろうか。

Column

世田谷区地域共生のいえ

我が家を地域にちょっとだけ開く

世田谷区の外郭団体、一般財団法人世田谷トラストまちづくりでは2004年から「地域共生のいえ」という自宅の一部を地域に開く支援を展開している。子どもが巣立ち、空いた部屋を使って地域に恩返しがしたい、交流を楽しみたいなどの想いから2018年現在で21カ所がオープンしている。「オーナーは60代以上の女性が中心で、アクティブな方が多く、自身がやりたいことを楽しみながら、自分の関われる範囲で継続しているという印象です」と世田谷トラストまちづくり地域共生まちづくり課・松本伸さん。

長年の活動で認知度が上がり、最近は世田谷区から子ども食堂や中高生の放課後の居場所などといった福祉的な事業をやってみないかというアプローチもあるという。住宅には公共施設の会議室にない温かみとゆとりがあり、使い方の自由度が高い点が評価されているのだ。家を開くことで我が家が地域に役立つ存在と認められ、かつ自分も楽しい。家も住む人もハッピーになれる利用法といえよう。

Case14

Okatteにしおぎ

パブリックコモンなキッチンに人が集まる

シェアハウスでは入居者だけでなく、地域の人たちなどが利用できる開かれた共有スペースを設ける例が増えている。前項で紹介した荻窪家族レジデンス、みかんハウスなどにもそうした空間があり、各種イベント等が行われている。そんな中でも杉並区にあるOkatteにしおぎ（以下Okatte）は場を開く事例としてよくメディアに取り上げられ、最近は視察も多いという。

Okatteはオーナーの竹之内祥子さんが子どもの独立で空いてしまった自宅を相続も視野に入れて活用しようと思ったところから生まれたシェアハウス＋有料会員制のシェアキッチン＆リビング。既存建物を改修、2階に3室の個室があり、1階にもう1室の個室と入居者と会員が使える広いキッチンと、それに続く和室がある。キッチンは会員制、会員が自ら運営している。

会員は現在通し番号で100人ちょっとおり、そのうちコアなメンバーは30～40人、時々来る人を入れると50～60人ほど。月額1000円の会費を払えば自分の好きな時に来て場を使うことができる。ホームページにある通り、家以外のもうひとつのリビング、キッチンとして自由に使えるようになるのだ。

実際の使われ方としては週に1～2回、晩ご飯を作って食べる日があり、週末を中心に何かしら口実を設けた飲み会やイベントで多人数が集まることもしばしば。一方で食とは無縁の裁縫の会があったりと使い方はその人次第。一応、食がメインとされているが、料理教室をやりたいとメンバーになった人が他の活動に熱中していることもあるとか。本当に自由なのである。

2015年春オープンからしばらくは竹之内さん、企画に携わった齊藤志野歩さんが目配りしていたが、現在ではメンバーだけで自走している状態という。人が多く集まり、それぞれが好きなことをやりながら、潤滑に運営され、人の輪も広がる。どうすればそんなことが可能になるのか。

最初に全然違う人たちが集まり、一緒にチームを作って進めてきたことが功を奏していると齋藤さん。いろんな人がいるから人間関係が固まらず、自分たちが考えていた以上に広がったというのである。料理をメインにしながらも料理だけと限定しなかった点もプラスに働いたという。料理ができる人だけと限定しているわけではないので、入って来た人はそれぞれに自分の役割を見つけ、それを楽しんでいる。出入り自由のメンバーシップ制も気軽で入りやすいのだろうと思われる。

加えて、いくつかキーワードが出た。齋藤さんはここはツィッターの別アウントみたいなものだという。「町内会、会社、ママ友といった集まりは立場、関係が明確で、●●ちゃんのママ、課長の▲▲さんとして人と接しています。ところがOkatteにはそれがない。勤務先を聞くなどといった名刺じゃんけんがないので、マウンティングする必要もなく、素の自分としていられる。そうした場を欲する人が多いのだろうと思います」。

自然素材を使い、屋上緑化を施したOkatteにしおぎ。週末などを中心にメンバー以外も参加できるイベントも開かれている

竹之内さん（左）は場を開く経験などを論文にし、齊藤さんは各種勉強会などの講師としてもよく呼ばれるようになっている

コンセプトが人を排除する

コンセプトをしっかり作らなかったことが場を生んだと竹之内さん。「マーケット、パイが見えているならコンセプトは有効ですが、人の輪を生むのにコンセプトは無用。コンセプト外を排除することになります」。マーケッティングを業としてきた竹之内さんは最初、コンセプトの無い状態を不安に思ったそうだが、場を開こうとするのに、そこに制限を設けるのは逆効果と知ったという。

共有の場だけでなく住居があるのも場の雰囲気を良くしている。同じキッチンのある公共施設にはどこかひやっとした感じがあるが、居住者のいるOkatteにはいつも人の気配がして温かい。住宅として見た時にもその点は魅力であるらしく、オープン以来ほぼ空室期間はない。風通しの良い人間関係のある場は住まいとしてもうれしい場なのだろう。

Case15

一戸建て利用の民間図書館

我が家の一画を図書館に

千葉県佐倉市にある一戸建てを利用した民間図書館。書籍、貸出の仕組みなどは岡さんが独自に開発、誰にでも使える

千葉県船橋市で10年前から民間図書館を作る活動が続いている。中心となっている岡直樹さんは当時大学生。都内まで通学、帰ってくるとすでに図書館は利用できない時間である。それならば、自分でも使える図書館を作ろうと考えたという。

利便性だけで選ばれ、他に便利な場所があったら他のまちへ引っ越していく人の多い船橋の現状を変えたいという気持ちもあった。「100人友達がいたら、ヨソへ引っ越さないでしょう?」。図書館を通じて人間関係を作ろうという試みである。

書籍は寄付で集め、運営する人はすべてボランティア。公共の図書館とは違い、人が触れ合い、繋がる場としての民間図書館は徐々に人を集めるようになり、現在では船橋市を中心に遠いところでは京都府、福岡県に至るまで91館にも増えた。関わるボランティアものべで1000人以上になっているという。

そのうちのいくつかの図書館はマンション、有料老人ホームに作られており、2016年には一戸建てを利用した図書館も誕生した。ここは空いてしまった二世帯住宅の上階を利用したもので、母を亡くしたオーナーがこれからの人生を仕事以外で社会に貢献したいとオープンさせた。図書館に人が集まるようになれば、一人暮らしの生活も張り合いが生まれるというものだ。

世の中には家を閉ざしたままで引きこもり、孤立していく高齢者の例が多数あるが、開いてしまえばそうした事態は防げる。そう考えると、住まいを開くとはそこに住む人を開くことであり、実はもっとも本人のためであるのかもしれない。

Case16

商い暮らし

住まいにプラスアルファを求める人が増えている

自宅に開いた場を作りたいと考えている人は意外に多いはず。そう考えた小薬順法(こぐすりよしのり)さん、永吉大輔さんが立ち上げたのが「商い暮らし」。1階に店舗、2階に住宅という、いわゆる店舗付き住宅を扱う不動産ポータルサイトだ。これまでの不動産市場では店舗として扱われることが多く、空き家になった場合には次も店舗として貸すというケースが多かったが、そうでない貸し方、借り方があってもいいのではないかというのである。

実際、店舗付き住宅の元スナック部分をほとんど改装しないでそのままリビングとして使い、2階の2部屋をルームシェアして2人で暮らす例や水が流せるバイクショップだった1階に大きな水槽を置いて趣味三昧で暮らしている人などもおり、アトリエ使用なども考えると店舗付き住宅のニーズは確実にある。

「そもそも、オンとオフを作っているのが間違いではないかと思うのです。商いと暮らすを一緒にしたら、もっと自分らしい暮らしができるのではと考えています」と小薬さん。

もちろん、全員がサラリーマンを辞めようという話ではない。店でなくても趣味のアトリエ、ホームパーティーを楽しむなどの場として住まいに周囲と交わる、ある種の余白部分があれば人生はもっと楽しくなるのではないかというのである。

「住居と別に場を借りるとしたら高くてできないことも、店舗付き住宅なら可能になる。場がないから好きなことができないと思っていた人に、こういう手があるよとアドバイスすると、途端にこんなことがやりたかったんです!となる。空き家の増えるこれから、チャンスはあります」

商い暮らしのホームページ。同社も店舗付き住宅を利用。1階をレンタルスペースにし、2階をオフィスとして使っている

Case 17

佐久間奈都子さん

自分で作る、いつまでも完成はしない

世田谷で住んでいた築60年の賃貸を出ることになり、以前から住んでみたいと思っていた神奈川県の三浦辺りで家を探し始めた佐久間奈都子さん。飲食店を経営する佐久間さんはそれ以前から週に2〜3回は野菜などを買いに三浦を訪れており、車利用なら1時間ほど。帰宅が深夜になるため、公共交通が使えない佐久間さんにとって三浦はさほど遠くはない。

1年間毎日検索し続けた結果、巡り合ったのが今の住まい。20年ほど無住だったという築85年以上の民家だ。見に来た時には床は傾き、障子は破れ、窓は真っ暗と完璧な廃屋状態だったが、隠れ家風のアプローチも広い庭も手の込んだ建具も魅力的だった。

購入したのは2016年秋。2017年春に引っ越し予定でとりあえずは大工さんに頼んで素人には難しいと思われた基礎の傾きを直し、今はリビングになっている和室をフローリングにする作業までを依頼した。

「とりあえず住める段階までしてもらったので後は自分たちでやってきました。家族はもちろん、2〜3カ月に一度店の常連さんたちが作業をしに来てくれます。彼らも楽しそうなんですよ」と佐久間さん。自宅ではここまで大掛かりに家をいじることはできないが、この家でなら思う存分いじり倒せる。いやいやの労力奉仕ではなく、参加者にとっては楽しい遊びなのである。

目指すのは人を迎え入れる家

だが、といっても進捗はそれほどはかばかしくはない。廃墟の段階を知っている人からは大分、進んだねと言われるそうだが、土間にして薪ストーブを置く予定の玄関はタイルが置かれただけの状態だし、材料も室内あちこちに積まれている。

リビングや水回りは住める状態にまで整備されている。洗面所は自分たちでDIY。バスタブはヤフオクで買ったという。プロがきれいに塗った壁に子どもが落書き。「書きたくなる気持ちは分かる」と敢えてそのままに

小さな家で小さな犬は嫌だったと愛犬はエアデールテリア。経営する店内も手作りで仕上げた部分多数

「いつ完成するの？とよく聞かれますが、たぶん、完成はしません。ある程度できても、古い家だからどこか他の場所が壊れる。だからいつまでも未完成でしょうね」。

その佐久間さんが目指しているのは人を迎え入れる家。今の都会には外に窓がなく、人を遮断するような家も多いが、そうではなく、縁側や玄関土間でおしゃべりが楽しめる、人を信頼できる家だという。

「おばあちゃんの家がそんな感じでした。ただ、若い頃、全く惜しいとも思わずに取壊し、建替えてしまった。なぜリノベーションしなかったんだろう、今はそう思います」。

人生に躓いて モノの見方が変わった

意外なことに若い頃の佐久間さんは新し

いモノ好きで、車は新車、家は新築、椅子ですら他人が座ったモノは嫌と思うほどだった。それが変わったのが離婚を経験してから。「もっと自由でいいんだ、こうあるべきと他人の目を気にしなくなりました。それからでしょうね、誰にでも買える新しいモノよりも、ここにしかない、時間を経たモノを愛おしく感じるようになりました」。

今の住まいに引っ越して1年ほど。大きな変化は娘を叱らなくなったこと。いくら走り回っても、騒いでも気にならない家、落書きしても味と思える家だからだ。そこで元気にはしゃぐ娘を見ているのが幸せだと佐久間さん。

もうひとつ、手伝いに来た人たちがどんちゃん騒ぎしながら飲んでいる脇でうとうと居眠りするのも大好きになったとも。気持ちよさそうである。

玄関土間、玄関脇などあちこちが作業中。どう手を入れるか悩んでいる部分もあるとか。既存建物は細かい部分の意匠、使い勝手が秀逸とその部分はできるだけ残して使う予定だ

Case 18

いえづくり教習所

二十歳になったら家を作ろう

2015年8月以来、年に一度、高知県で「いえづくり教習所」なるスクールが開かれている。毎年少しずつやり方は変わってきてはいるが、文字通り、家の作り方を教えてくれるもので、3週間かけて1軒を作る。もちろん一般的なサイズではないが、ここから高知に移住、大工になった人もいる。

主催しているのは高知市の建築士、中宏文さん。東京の大手建築設計事務所に勤務した後、職業訓練校で大工仕事のイロハを学び、同訓練校で非常勤講師を務めた後、高知で独立したという経歴の持ち主である。普通、建築家は現場の仕事はできないことは多いし、特に大学で学ぶことの少ない木造建築は不得手。だが、施工が分かったほうが仕事の幅が広がる。

「それに」と中さんは提案する。自分で空き家に手を入れられるようになれば、住居費を大幅に軽減できるようになる。特に地方であれば人間関係次第でタダ同然で家を取得することは夢ではなく、それを自分で改修できれば住居費は限りなくゼロに近づけられる。

今、私達の多くは人生で稼ぐお金のうちの多くを住宅に注ぎこんでいるが、もし、それを支払わなくて済むようになったら、あるいはごくごくわずかな支払いで手に入れられるようになったら、生活は、人生は大きく変わる。住居費が払えないからと結婚を躊躇っている人が結婚できるようになれば、個人の人生だけでなく、この国全体の行く末も変わるかもしれない。

中さんがいえづくり教習所を思いついたのは東日本大震災後。被災後に自分で身を守るだけの家を作れるようになれば安心だろうという発想だ。だが、家を作れる人が増えた先にはそれ以上に楽しいことがある気がする。

中さんが東京で開いた防災美食塾の一場面。みんなで災害時に役立つ小屋を作り、防災食を食べるイベントだ

Case19

三文字昌也さん

純粋な住宅街には住みたくない

長らくワンルームが若者が望む住まいと考えられてきた。実際、多くの人がワンルームなど独立性の高い住居を選んでもいる。一方でそれ以外の暮らしを志向する人もいる。文京区本郷で風呂無し、トイレ共同のアパートに住む三文字昌也さんはワンルーム物件には興味がなかった。

「友人の住む京都に遊びに行き、YMCAの寮の4畳もない古い部屋に住む友人に憧れた。一緒に行った銭湯はテレビの中の存在と思っていたから新鮮だった。また、あちこちに顔見知りがいて、まちと住まいが近く、自由な雰囲気もあって羨ましく思いました」。

部屋単体でというより、まちも含めて住む場所を考えたということだろう。三文字さんの生まれ育った中央林間と比べると京都は大きく異なる場所だ。

「住んで寝るだけの場所だった中央林間にはさほど愛着はなく、夜になると駅前にしか人が歩いていないまちは寂しい。それよりも人間が感じられる場所がいいと思いました」。

縁があって本郷でまちづくりを行う街ing本郷が活動に参加することを条件に安く提供されている現在の部屋に住むことになった。プライバシーどこへやら、隣の声が聞こえる部屋である。加えて三文字さんの部屋には人が集まり、いつの間にか居酒屋状態。しかも、見て分かる通り、その状態を楽しんでいる。「一人になれる場所は他にもあるから部屋で一人になる必要はない」とも。

本郷は通りに出れば賑わいがあり、人がいる。少なくなったとはいえ商店街もあり、会話がある。住宅だけでない部分が評価されているわけだが、長らく住宅街は閑静が良しとされてきた常識が今度どうなるか。若い人たちの評価を待ちたい。

居酒屋仕様の部屋には最大で10数人集まったことがあるとか。近所の銭湯を利用しているが、近年廃業する銭湯も相次ぐ。写真は三文字さんたちが記録を残す活動をした菊水湯

Case20

家いちば

そもそも、住宅の価値って何？

ここで改めて書くまでもなく、空き家が増えている。所有しているだけで負担と感じる人もおり、2015年にスタートした所有者が空き家を売り買いする掲示板「家いちば」は大盛況である。

2017年以降、新聞、インターネット、テレビと立て続けに取り上げられていることもあり、常に200～300通の返信をしなくてはいけないメールが溜まっている状態とか。成約件数は32件を超した。情報の殺到ぶりが分かるというものである。

中には「タダで上げます」どころか、「残置物を引き取ってもらえるなら50万円出します」などと所有者がお金を出しても譲渡したいとするケースもある。かつて土地の価値が絶対と信じられていた時代からすると隔世の感とはこのことだ。

その一方で所有者が「タダでも」という廃屋に価値を見いだす人もいる。都心から遠い、多くの人が知らない農山村に興味を持つ人も多い。これまで流通しないだろうと思われていた地域、物件が動き始めているのである。

仲介手数料や縦割りになっている不動産関連情報の分かりにくさ等、まだまだ空き家流通には障壁はあるものの、家いちばを運営する藤木哲也さんは「一般の人たちは価値が多様化していることに気づいてさっさと行動している」という。遅れているのは法律、不動産業界であるとも。

その行動に伴い、都心部では今後も高い価値を持つ資産であり続けるとしても、それ以外の場所の不動産はこれまでとは違う価値、尺度で計られるようになっていくはず。それは私達の幸せにどう関わってくるのか。大きなテーマである。

家いちばにはほとんど廃墟のような物件から、そのままで住めるような物件まで幅広い状態、地域、規模の物件が掲載される。最初に掲載されたのは郵便局だったが、同物件もめでたく売却された

住と幸せの関係を再考して

―不動産取材36年間に見てきたもの―

36年間、不動産の原稿を書いている。数えきれないほどの家を訪ね、物件を見学した。その中にはいくつもの記憶に残る家、言葉があるが、もっとも衝撃的で、いまだに私に影響を与えているのはある新築マンションにお住いの家族を訪れた時のことだ。ぴかぴかの、きれいに飾られたリビングで話を聞いた。「どうしてこの部屋を選ばれたのですか?」

その質問への答えは「予算的にこれしかなかったし、一番一般的な間取りだって聞いたからです。みんなが選んでいるなら間違いないと思って」。

私が「え?」という顔をしていたからだろう、妻が付け加えた。「買えただけで幸せですわ」

今ほど選択肢のない時代だった。だからだと思う。だが、それで良いのだろうかと私は思った。人生のうちの長い時間を過ごし、生涯稼ぐお金のうちの多大な額を費やす空間である。もっと自分本位に、自分たちが幸せになるために選べるようになるべきではないか。私はその時以来、ずっとそう思いながら仕事をしてきた。

そして実際、この10年ほどで住まいの選択肢は往時よりははるかに広がり、自由な選び方、暮らし方などができるようになってきた。ここまでのページでは紙幅の関係でわずかながらだが、そうした事例を紹介した。

それぞれにそれぞれの考え方があり、暮らし方があるが、ひとつ共通するのは建物そのものよりもその中での自分たちの暮らし、やりたいことが優先されていることだ。また、住まいという場に家族や社会を変える力があると考えている人も多かった。住まいと働き方や社会のありようなどがリンクしていることもお分かりいただけたと思う。

進歩が常識を疑うことから始まるのだとすれば、より幸せな住まいを手に入れるためには自分の頭の中にある「住宅かくあるべし」を一度疑ってみても良いのではないかと思う。

横浜市西区西戸部にあるヨコハマアパートメントは各部屋よりも、共有部が広いほうが楽しいだろうと1階に80㎡もの共用部がある賃貸住宅。1階の天井高は5m。共有部を利用して月に1～2回、様々なイベントが開かれている

家は不動産であり、動かないというのが基本。だが、車を家にしてしまえばその常識は覆せる。写真は高知で会った軽トラ利用のモバイルハウス。好きなところに泊めればそこが家になる。ただし、寒暖は厳しいそうである

住宅を買おうとすると、まず住宅そのものに目が行く。だが、まちを知って、好きになってから選ぶという手はないかという試みがあちこちで行われている。生活は住まいの中だけで完結するものではないと考えると確かにその通り

徳島県神山町の町営住宅は町の大工さんが時間をかけて少しずつ、地元産の木を使って建てるという。間取りは地域の民家のスタイル、生活の仕方に学んだもので、100年後、200年後も愛される住まいを目指すという

千葉県山武市にある高齢者自らが高齢者と共に暮らすために作った「むすびの家」。広い共用部、水回りがあり、共用部では一緒におやつタイムを楽しむことも。敷地内にも、外部にも畑があり、農作業をしたり、花を栽培する人もいる

杉並区高円寺の社宅をリノベーションしたアールリエット高円寺。1階にテナント区画、それ以外にも店舗兼住宅、アトリエ兼住宅という区画もあり、住むだけではない多機能ぶりが話題になった。

PROFILE

中川寛子（なかがわ・ひろこ）（株）東京情報堂代表取締役・住まいと街の解説者。編集プロダクションを経て1988年に同社を設立。住まいや街の情報をメディアで発信するほかセミナー等も行う。『住まいのプロが教える30の警告「この街」に住んではいけない』（マガジンハウス）、『住まいのプロが教える家を買いたい人の本』（翔泳社）、『解決！空き家問題』（ちくま新書）など著書多数。http://www.tokyojohodo.co.jp/

3-2

住宅幸福論 ── 幸福解体編

「家庭の幸福」という呪いを解体する

石神夏希（劇作家）

はじめに ── 幸福を解体する＝呪いを解く

「家庭の幸福という呪い」を解体する。それは「普通」や「日常」を解体することでもある。それらがかつて人々を奮い立たせるエンジンだったり、安全に導く命綱だったりした時代もある。今それが機能不全に陥っているのは、人々のライフスタイルが多様になって、みんなが異なる　個性を発揮するようになったから、ではない。

選択肢が増えるということは一見、世界が豊かになったように思える。だが実際には、みんなが同じ選択肢を選んでも、別の結果を生じるようになったから。つまり世界がエラーを起こすようになったからだ。

かつての共同体が失われた世界で人々は前例に従うことができず、試行錯誤して傷だらけになりながら、自分なりのやり方を模索するしかない。システムエラーは自己責任として個人に転嫁され、個性という言葉で美化される。

私たちはなかなかに厳しい戦いを強いられている。「失敗は何度でもできる」「やり直せる」というけれど、自分の人生は一度きりで、やり直しはきかないから。そんな美しい教訓ですら、かつて機能していた呪いのひとつでしかないのだから。

オルタナティブな呪いを召喚する

いきなり不吉なイントロダクションで始めたのは、いま一度、私たちが「幸せ」や「いいこと」だと信じてきたことが「呪い」になり得ることを確認したかったからだ。毒をもって毒を制す。古くなった幸福像を解体するなら、オルタナティブな幸福像を提示すればいいと考えそうなものだが、“そいつ”の正体が幸福の仮面をかぶった呪いであることを暴くには、こちらも正々堂々、呪いで対決しなければならない。つまりオルタナティブな呪いを召喚しなければ、この呪いはきっと解けない。

もう少し詳しく説明しよう。たとえ私が何百年も生きた魔女でなくても、少しだけ俯瞰して見れば、人間はいつの時代も幸福という呪いにとらわれて生きてきたに違いないと推測できる。想像してみてほしい。今、私たちが「前時代の幸福（像）という呪い」から逃れようとして、「新しい幸福（像）という呪い」に積極的にかかろうとしている姿を[※1]。

亀を救った御礼に連れて行ってもらった竜宮城は楽園だったかもしれないが、浦島太郎が玉手箱を開けた後の世界は、妙に苦い。竜宮城は果たして幸福だったのか、それとも呪いだったのか。むしろ、玉手箱から出てきた煙は魔法を解くタブーだったのか、呪いを解く愛だったのか、はたまた古い呪いを無効にするオルタナティブな呪いだったのか。答えはひとつではないだろうが、歳をとる、というエンディングには救いがある。なぜなら浦島太郎は生き延びたからだ[※2]。

夢から覚めたくないのはやまやまだが

幸福にせよ呪いにせよ、“そいつ”に殺されずに生き延びる。そのために私が希望を見出し、本稿で読者の皆さんと観察・考察してみたいのは、それが幸福か呪いかではなく、具体的な「解体の手つき」のほうだ。「方法」や「技」というほど確立されたものにはならないかもしれないが、それはどんな「手」で解体することができるのか。鋏を使うのか包丁を使うのか、それとも素手でいいのか。バラバラにしたあと何がつくれるのかは、解体してから考えるのでもいい。

もしかしたら荒廃した野っ原で、手がかりもなく立ちすくむ

※1：深尾葉子、安冨歩らの研究する「魂の植民地化」という考え方も参考になる。（参考：深尾葉子『魂の脱植民地化とは何か（叢書 魂の脱植民地化 1）』青灯社、2012）

※2：たとえば中沢新一は『人類最古の哲学 カイエ・ソバージュ（1）』（講談社、2002）の中でシンデレラの物語を人類のもっとも原始的な神話的思考の「残骸」とし、主人公は生者と死者の世界を仲介する存在であったとする。一方で今日よく知られた民話や童話としてのシンデレラが語る「末永く幸せに暮らしましたとさ」というエンディングについて「多くの場合仲介は永続しないのです。むしろ永続するのは、破綻した状態のほうであって、そういう場合の神話では悲劇的な破綻に見舞われた主人公たちは、空の星となります。星となって永続し続けるのです。」と述べている。魔法や呪いは、しばしば命と引き替えに初めて解ける。

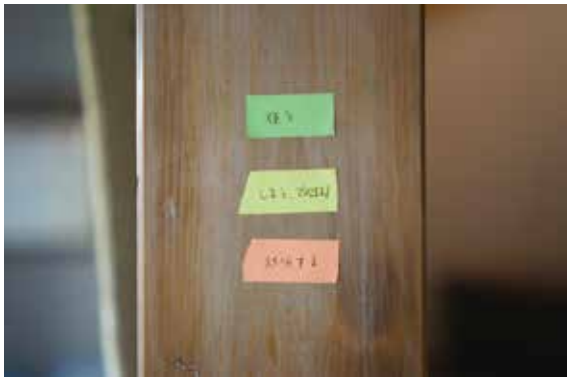
ようなことになるのかもしれない。追って事例でも見るように、自分の頭で考えて生き方を発明するのはかなりしんどいことだし、「皆がそうすべきだ」などと主張すれば、強者の理論といわれても仕方ない。だが一方で、見えない弱者が救われる可能性はある。誰かが死なずに済むこともあるかもしれない。

本稿の構成

本稿では、ある女性の住まい方の実験（の過程を記したウェブサイト）を事例として「幸福を解体する」すなわち「呪いを解く」とは具体的にどういうことか、考えてみる。

主に彼女のウェブサイトからの抜粋を考察していくが、同時に、本稿のために新たに書き下ろしてもらったエッセイも収録されている。エッセイにエッセイが格納される、筆者の語りの中に語られる対象本人が登場して自分の言葉で語り出す、という入れ子構造をとることで、本稿が彼女の体験や言葉を編集して（従属させて）都合よく論を展開させるのではなく、それぞれが対等な、自立した話者として相対化される効果を期待している。ささやかだが、これもまた新たな「呪い」を生み出さないための予防策だ（功を奏するかはわからないが）。彼女のエッセイの後、筆者による考察をもって本稿を締めくくる。

なお報告書全体で見た時、本稿の役割は「定量調査や定性調査、有識者の知見」といった信頼性の高い情報を積み木のように組み上げた上で、その積み木の山にあらぬ方向から衝撃を与えてバランスを危うくすることである。それによって読者に問いかけ、共に考えるきっかけとなることを企図している。また本稿は先行研究や主張の根拠として十分な調査、反証可能な論の展開といった、論文が備えるべき手続きをスキップしている。取材対象者はたった1名かつ筆者は彼女と同年代であり、「幸福論」という時代背景を色濃く反映する話題を客観的に語るには、相応しくないかもしれない。従って本稿はあくまで主観的で、時代背景も限られた「エッセイ」であることをあらかじめお断りしておきたい。だがそうした背景も含めて読んでいただければ、固有の体験の中に普遍性につながる糸口を見つけていただけるのではないか、と期待している。



「家庭の幸福という呪い」の解体を、観察する

中田一会（なかた かずえ）さんによる「家を継ぎ接ぐ（https://tghgie.wordpress.com/）」は、都心で一人暮らしをしていた彼女が、千葉の郊外にある亡くなった祖父母の家に引っ越して暮らす日々を綴るウェブサイトだ。

中田さんひとりが執筆するコラムで構成されるそれは、日記のようでもあるが、常に彼女自身の客観的なまなざしと分析が交えられ、まるで何かの実験記録やセルフドキュメンタリーのようにも見える（彼女は「プロジェクトサイト」という言葉を使っている）。

最初のコラムは、彼女が引越しを考え始めたところから始まる。少し長いが、以下に引用する。なお本文中ではウェブサイトにならい、彼女の住む元祖父母の家をカギ括弧付きの「家」と呼ぶ。

もやもやと。

ここ数日、亡き祖父母が暮らしていた近県の一軒家に移り住もうかと考えている。
その家は祖母が亡くなってから5年ほど空き家で、近くに住む伯父が手入れに訪れてはいるが、築50年を越えて、だいぶガタもきている。母が「東京オリンピックのときにはそこを基地にしてみんなで観戦したい」と言ってるので（！）2020年まではなんとなく残す方向のようだ。今は親族みんなにとって、何かあった時の避難所的にぽつんとある。

（中略）

わたしは数年前に一回、家庭生活から逃げ、その家で過ごしたことがある。トランク一個で転がり込み、四ヶ月ほど暮らした。都心に通えなくもないエリアに、逃げ場があったことは本当に救いだった。だけど、いろんな事情と気持ちから、長くは住めなかった。

でも今なら住めるかなと思う。

「家を継ぐ」のではなく、その家をあとちょっとだけ持たせるための「継ぎ接ぎ」の接着剤として自分が収まる。同時に自分の人生の「継ぎ目」にその家の暮らしをあててみたいと思う。DIYやリノベーションのようなそういうハードの軽やかでおしゃれな話ではなくて、もう少し引き受ける形の継ぎ接ぎ。継ぐ、接ぐ。それについて考えながら、珍妙にしか生きれない自分の、それにあった暮らしをここで始めてみるのもいいかもしれない。

（『計画』2017年7月10日）

きっかけは、相続で家が失われてしまうといった「家」側の事情ではなく、自分自身の住まい方に関する違和感 ──「東京にしっくり来る家（エリアも含め）がない」ことだった。

先輩と、自分の年頃にふさわしい暮らし、ふさわしい家…を選ぼうとすると本当に東京は高いねえとため息をついた。本当にそう。ちょっと無理。無理すればいけなくもないんだけれど、その無理が無理。何か大事なことを失う気がする。

身の丈ちょうどの箱に住むとなんだか気持ちもしぼむ。少し背伸びすると自分の首をしめる。だいたい東京の設定している身の丈は、すごく消費型の身の丈なのだ。「稼げ稼げ」と聞こえて来るけれど、稼いでその暮らしを保つことが目的化する

のはなんだか空しい。

（『身の丈』2017年7月11日）

東京多摩地区で生まれ育って、社会人になってからは都心に「上京」し、世田谷まわりで10年暮らすうちに家族の形や暮らしの条件が何回転も変わってザワついたり落ち着いたりして、今。改めてこの先どこで生きてこうかなーと考えると、家というハコにも街という場にも、色んなハッシュタグが透けてみえて気になってしまう。例えばひとから、「ほら君にぴったりの#30代女性 #バツイチ #丁寧な暮らし #カメ飼育可 のエリアで物件だよ？」とか言われたら、「そんなの決めないでよ！」と却下してしまいそう。嗚呼へそ曲がり。

（中略）

#リノベでDIYでおしゃ生活！ とか、#airBでシェアリング生活！ とか、そういうハッシュタグ的暮らしは、諸般の条件的にまったく向かない一軒で、結構遠い。だけど、ひとに用意されたハッシュタグが嫌なら、自分で新しいレイヤーを創造するしかないのかなと思う今日このごろ。

（『宣言』2017年7月17日）

「珍妙な暮らし」への共感

まだ迷いながらも、彼女は「いいんじゃない、向いている気がする。おもしろそう」と言ってくれる職場の先輩や、SNS上でシェアしたところ予想以上に多く集まった共感の声に背中を押され、いよいよ亡き祖父母の家に引越すことを決意する。

昔、「そういうことは世間では普通じゃないから言わないほうがいい」と、女性としての人生観について女性から指摘を受けたことがあったっけ。（中略）

ともあれ、そんな珍妙な道を歩む女が、祖父母の珍妙な家を選ぶことで、それでもいいんじゃないという人の縁をたぐり寄せている。気がする。きっと大変だけど、なんだかいい予感がする。

（『たぐり寄せ』2017年7月19日）

そんな予感どおり、まだ住み始める前から、古い写真をリサーチしているアーティストのH君、空間設計のIさん、コピーライターのMさん、カメラマンのK君、映像作家のSさん、そして引越し祝いに「家」のためのオリジナル・サウンドトラック集（「AM休」「PM休」「家路」という3種のプレイリスト、全曲とも選曲解説付き）を送ってくれる職場の先輩・Oさんなど、彼女の考えや感性に共感した仲間が次々と集まってくる。

彼らは中田さんが捨てるほかないと思っていた家財や残された土産物を面白がる。そして「リノベーション」という言葉にふさわしいような工事は一切せず、扉を外す・照明を変える・すでにあるものの置き場所や並べ方を変えるといった「模様替え」だけで「家」の中に新しい住空間を立ち上げていく。

そんな中田さんの暮らしに「ひとりで大きな一軒家で寝るの、こわくないの？」と聞く同世代の人もいる（『眠る場所』2018年9月4日）。一方で「あなたは受け継ぐことを考えてるけど、わたしは最近捨てることばかりを考えてるのよ」と連絡をくれた66歳の女性もいる。友達の母親である彼女と共に、還暦を迎えてから円満に「別居生活」を提案した夫（つまり友達の父親）が一人暮らしを謳歌するマンションに乗り込むエピソードは痛快だ（『お父さんの秘密基地』2018年9月7日）。

開け放しの門が人を招き寄せる

一週間かけた引越しの最終日には「家びらき」をして友人知人に「家」を開放し、2017年の暮れには「芋煮会」を開く。4歳児から60代まで総勢20名。中田さんの大学の後輩、前職の同僚、現在の仕事仲間や関西から訪れた人など、年齢もバックグラウンドもバラバラな人が集まった。かといって中田さんがみんなに何かを振る舞うわけでもなく、台所に立つのはいつも料理上手の弟や友人たちだ（『芋を煮る』2017年12月5日）。

イベントに限らず、休日に友人たちが遊びに来てワイワイ料理をつくるのはよくあることだし、かと思えばたった一人で、ふらりと「エスケープ」しに来る友人もいる（『エスケープ』2018年1月4日）。

地域の人たちは彼女のふしぎな実験に、思った以上におおらかに接してくれる。これまで「家」を管理してきた近所の伯父は「美大出身は周囲の人材が豊富で面白いねぇ～！」とすんなり受け入れ、挨拶回りから家の片付け、バルサン焚きまで世話を焼いてくれる。

門を開け放しにしておけば、庭越しのお向かいの奥さんがおすそ分けを持ってくる。休日に見よう見まねで庭の手入れをしていれば、散歩中の「昔このあたりに家を建てたかった」という90歳のおじいさんに突然、園芸をレクチャーされる（『門を開ければ』2017年10月27日）。

そして、かつてのご近所さんがふいにインターホンを押す。

「こんばんは。昔、お向かいに住んでいた◯◯です」

ハッと気づく。子どもの頃、たまに遊んでもらっていた家族だ！　でも一家は引っ越して、赤い屋根の家も賃貸アパートに姿を変えたはず…。

「さっき息子が、お宅の前を通って、おうちが全開で、笑い声が聞こえたって教えてくれて。もしかして、親族の誰かが戻って住まわれてるんじゃないかと思ってご挨拶にきたんですよ。うち、引っ越したけど、新しい家も歩いてすぐそこなんです」

驚いた。嬉しい。その人はわたしのことを覚えていて、ここに暮らすことを伝えるととても喜んでくれた。空家よりずっと安心、よろしくお願いしますと言って、親子はにこにこと去っていった。

（『家を灯せば』2017年10月10日）

彼女のふしぎな（そして正直すぎる）問題提起が周囲の人たちを巻き込んでいるのか、彼女の行動に刺激されて溢れ出した周囲の人たちの（勝手な）思いに、彼女自身が巻き込まれているのか。もはやどちらとも判別がつかないが、彼女も周りの人たちも楽しそうだ。

だが惹きつけられるのはその「楽しそうな雰囲気」よりも、むしろ暗渠の水音のように底流に流れ続ける「寂しさ」のほうだ。

寂しいから、寂しく暮らす

彼女は以前、元夫と暮らしていた落ち着いた住宅街から家出したことがある。「とにかく家族の匂いがしない賑やかなまちがいい」という条件で、都心のど真ん中で一人暮らしを始めた彼女は「おかげで、毎日本当に騒々しくて、息つく暇もなかった。寂しくはなかった。タフにもなった。ただ、刺激に動じなくなった分、わたしの中の何かが鈍くなった気がする」と綴る（『東京南側』2017年9月17日）。都会の賑やかさは寂しさをかき消してはくれたかもしれないが、解決はしてくれなかった。

独特の寂しさをどうにかするために、寂しいまちの寂しい一軒家にひとりで住もうとしていて、その様子を黙々と記録している。

（中略）

この「家を継ぎ接ぐ」というサイトをわざわざ立ち上げて、とても個人的なことをわざわざ書こうと決めたとき、わたしの内側にあった前提はこうだ。

「世の中の多くの人は、ひとりぼっちでいるのが辛い。結婚したい、家族が欲しいと思っているし、その望みが叶って幸福な人は離婚したいとは思わない。東京のピカピカマンションと千葉のボロボロ一軒家だったら、もちろん前者をとるし、中古の戸建てに住むならせめて綺麗にリノベーションされた物件で暮らしたい。都会を離れるなら、豊かな山や海がある環境がいい。濃厚なご近所付き合いや、親族の思い出と思惑が詰まった家財を引き受けるのは重い。不便な家電や設備で苦労したくない。ライフスタイル誌を完璧に実現した暮らしは無理だとしても、キラキラした生活はしてみたい」

（中略）

東京はいいまちだ。いい友達もいい仲間も沢山いる。人に囲まれていたり、楽しく飲んだり、騒いだり、新しく出会ったり、そういうことは健康で多少のお金があればいくらでも何歳でも続けられる。一緒に暮らす相手だって探せば（たぶん全力で探せば、たぶん…わかんないけどたぶん）見つかる。

でも、それだけでは寂しい。寂しさが埋まらない。

わたしはどうやら、それをどうにかしたかったらしい。まちや家や距離が物理的に寂しくてもいいから、このズレを共有できる何か、誰かと、ちゃんと繋がってみたい。そのための行動、そのためのサイトなのかもしれない。

（『寂しさをどうにかする』2018年8月31日）

友人たちに囲まれた賑やかな暮らしでは、寂しいままだった理由。それはきっとその「寂しさ」が、誰かと一緒にその存在を認め合うことでしか埋められない「寂しさ」だったから。

それを見つめる覚悟を持った人たちとだけで、どこか静かで何もないところへ行って、寂しさそのものが発する微かな声に耳を澄ませ、それの放つ昼の月のようなぼんやりした光にじっと目を凝らすことでしか、慰められないたぐいの「寂しさ」だったからではないか。

楽しいから人とつながる。寂しいから人とつながる。そのどちらも本当だし、ひとりの人間やひとつの行動の中に両方ともあるのが普通。だが「幸福」を保留できる人は稀有だ。つまり、かつての幸福像が呪いであったことに気づいたときに、すぐに「新しい幸福像（という呪い）」を探しに行くのではなくて、その手前で立ち止まって「解体」の手を振るえる人は、そんなに多くない。筆者が中田さんのウェブサイトに惹かれたのも、「幸福を解体する」をテーマにした本報告書で紹介したいと思った理由もそこにある。

「思い出」の所有権

中田さんの実験はまず千葉の家から物理的に最も遠い友人知人、そして次に地域の人々のあいだに変化を伝播させながら、やがて最も身近な人間関係、すなわち「家」の当事者である家族や親戚に到達する。

親族一同にとって、何かあった時の「みんなの避難所」だった「家」。それがめまぐるしいスピードで開かれ、姿を変えていく── ハードとしてよりもむしろ、かつての意味や場所性を解体されていく最中で、彼女は年下の従兄弟からこんなLINEを受け取る。

「ちょっと相談があるんだけど、今度少しだけ家にお邪魔していいですか？　どんな家だったか、覚えておきたくて」

ハッとした。

あの「家」は、「おばあちゃんの家」で「みんなの家」だった。

もちろん、不動産には登記上の所有者がいて、場合によっては別途管理者がいる。だけどそういう法律的レイヤーの「所有」とは別に、記憶と経験のレイヤーの「所有」があって。家の思い出はそれぞれが持つもの。分割も譲渡もできない。わたしは別に家の法律的所有者でもないし、従兄弟と同じく記憶と経験を分有する一員に過ぎない。だけどわたしが住人になれば、その家はわたしに合わせて変わっていく。

「みんなの家」であることには（わたしの気持ち上は）変わらないけど、「おばあちゃんの家」では無くなってしまう。いや、みんなの家とも、従兄弟にはもう思えないかもしれない。それは確かに寂しいことだ。

（『所有』2018年8月23日）

従兄弟が「家も誰かに住んでもらえた方が良いに決まってるよ。（中略）あの家をよろしくお願いします」と言ってくれる一方で、母からは、あの家は「みんなの避難所」でもあるから、残しておいて欲しいものがある、従兄弟たちそれぞれのお気に入りの物があるからね、と釘を刺される。

継ぎ接ぎの家には、さまざまな「所有物」や「所属物」が物理的にも精神的にも継ぎ接ぎ的に存在している。愛を向けられてる家は、暖かいと同時に、重い。ずしん。

（同上）

家族、苗字、家庭

亡き祖父母の家を受け継いで住む。彼女の激しい「解体」ぶりを見ていると「受け継ぐ」という言葉は不似合いにも感じられるが、解体が激しければ激しいほど、解体されにくい、しぶとく残るものの姿も露わになっていく。自然な流れとして、彼女は「家」を解体しながらその中でもっとも解体されにくいもの――「家族観／家庭観」と向き合い始める。

たとえば、離婚してまもなく住み始めた都心のマンションを引き払うとき。解約手続きの際かつての姓を名乗らなければならないことへの居心地悪さを感じる一方で、彼女は「前と今では違う」「自分で変えられた」ことを確認して、ホッとしているようにも見える。

インフラを止めるにあたり、顧客番号がわからず、電話で手続きをした。そのたびに今では名乗ることのない苗字を添えて契約者名を告げる。ここに入居した頃、わたしは別の姓だった。

現状回復。
「返すときは元どおりにしてね」という約束は、入居時点での「現状」に基準がある。だけど、いざ退去するときは、目の前の状況が「現状」のはず。「過去の現状を回復」とは時空が歪んでないか…。

なんて、舌の上で言葉を転がしていたら、「現状」ではなく「原状」が正式表記だと気付く。（中略）

「原状回復」には、経年劣化や変化は仕方ないという前提が織り込まれているようだ。ほっとする。時が経てば、どんなものでも変わる。過去の「現状」には戻れない。部屋も、人も、苗字も生きる癖だって変わる。それでいいじゃないか。

（『現状回復』2017年9月17日）

中田さんは、母方の珍しい苗字に「子供の頃から憧れていた」という。そして引越した千葉の家で、（当然ながら）結婚していた頃の姓でも、離婚して戻った本来の姓でもなく、「家」にかけられた母方の祖父母の表札をそのまま残して暮らし始める。その苗字を名乗る人は、すでに一人も住んでいないというのに。

わたしの名前の手前につく、父方の苗字はあまりに平凡だったので。お母さんはなんでお父さんの苗字にしたんだろう、もったいないなぁ、と、よく思っていた。

（中略）

家と苗字、家と墓、家と籍、そして家とイエ。

夫婦別姓派でもないし、元の苗字にそこまで愛着もなかったというのに、結婚して苗字が変わったときは何ともいえない「変わってしまった感」にショックを受けた。すごくモゾモゾして、寂しくて、馴染めなかった。何人かの結婚した女友達に聞いてみると、それなりにみんな寂しい気持ちになるものらしい。結婚や新しい家族を楽しみにしていた友人Tも「名前が変わった日、ひとりで泣いたんだ」と教えてくれた。意外だった。たかが名前、されど名前。

「嫁に貰われる」「家に入る」……そんな時代ではないと東京生まれ東京育ちのわたしたちは教わってきた。でもそれでも、だったら一回ぐらい「どっちにする？」とパートナーに聞いてみてもよかったかもしれない。
そんなことを当時言ったら、母に笑われた。「そうよ。あんたたち、ジャンケンして決めれば良かったのに！」と。

面白いこと言うな。平凡な方の苗字を選んだくせに！と、わたしも笑った。母もきっと、本当は、ジャンケンしてみたかったんだろう。

（『苗字と表札』2017年8月10日）

「家族」が難しすぎる

一方、新潟の友達の田舎を訪ね、大きな家に一族が集まる親戚ぐるみのお盆に参加した夏休み。関東に戻ってそんな土産話を聞いてくれるのは、元夫だ。離婚話も含めてウェブサイトに書いていい、と快諾する彼について「『かつて家族だった』ということもそうそう途切れない縁だ」とつぶやく（『友達の田舎』2017年8月18日）。

一回り年上の彼は中田さんにとって「いまだに保護者のよう」な信頼できる存在。
だがお酒の席で再婚について聞かれた彼女は、思わず「もうそれって惑星探すみたいな話なんですよ」と口走る。

一回だけの経験からいえば、結婚とは条項が明確にならないまま結ばれていく契約だと思う。（中略）家族観、経済観、仕事観、

家事の癖、親族の状況、暮らす場所、健康問題諸々。話し合って歩み寄っての繰り返し。でも話し合えないことすら沢山ある。相手や自分が強く「常識」だと信じていることは、テーブルにすら上げられないからだ。決壊は、未相談事項から始まる。

「俺は普通の結婚がしたい。結婚の形とかから考えるのは正直いやだ」

ちょうど去年の今頃別れた恋人は、付き合う前にそんなことを宣言していた。（中略）わたしはわたしで「普通の恋人」らしい優しさを彼に望み、毎回勝手に裏切られた気分になっていた。お互いの「普通」が「普通」ではないことに気づかないという、とてもありがちな話だ。

（中略）

この広い世界で共生可能な相手を探すことは、惑星探査みたいだ。

（『惑星探査』2017年12月19日）

弟と暮らし始める

中田さんの弟は、3歳年下のITエンジニアだ。ふたりとも東京西側の郊外にある団地で育ち、それぞれ実家から独立して以降も都内で暮らしてきた。だが数年前に両親が（父の生家である）四国にUターンしたこともあり、顔を合わせるのは年に1、2度。

仲は悪くないが真逆の性格だという姉弟。だが祖父母の家への引越しで、その弟が一週間ほぼ住み込みで家の片付けを手伝ってくれた。それまで面識のなかった中田さんの友人知人と一緒になって朝から晩まで体を動かし、三食を共にし、挙句「なんだここ、超居心地いいな…」と名残惜しそうに帰っていく（『きょうだい』2017年9月21日）。

ふたりが生まれ育った東京には、すでに実家がない。両親に会うため四国を訪れても、そこは「帰る場所」ではない。両親も親族も東京暮らしが長く、四国の文化や風習が身近とは言い難い。祖父の法事で父・伯母・祖母に頼まれた中田さんが「真言宗　七回忌　祭壇　飾り方」とGoogle検索するエピソードはリアルだ。

そして久しぶりの法事で目の当たりにした「イトコ兄弟」たちの生き方を見て、弟は「全然ちがう人生なんだなあ」とつぶやく。中田さん姉弟とイトコ兄弟は同い年。暮らすエリアも離れてはいないが、イトコ兄弟は「早々に家族を持ち、郊外に新築一戸建

てを買って暮らしている。転職や移住に興味はないそうだ。趣味は筋トレ、ランニング、友達家族との家飲み」(『コントラスト』2017年11月6日)。一方、真逆の生き方をしている中田さん姉弟は「落ち着きそうにないね。わたしたち」と遠い目をしながら、乾燥機を買う相談をする。

実は中田さんは2018年3月で勤め先を退職し、フリーランスになろうとしていた。その矢先、弟が一足先に職場を辞め、同じくフリーランスとして別の職業を目指し始めた。そして「家」に引越してくることになったのだ。少し前まで、一年ぶりに街中でばったり出会っても肩を叩いて挨拶するだけで、立ち話すらしなかった姉弟だというのに。

台所を舞台に演じられる「家庭未満」という演劇

こうして中田さんたち姉弟は、自分たちの苗字ではない表札がかかった家で暮らし始める。まるで、架空の苗字をでっち上げて(実際には祖父母の苗字なので架空ではないが)『家庭未満』という演劇(もしくは『家庭じゃない』)を上演しているようだ。やはりというべきか、その中心的な舞台は、台所だ。

おはよう、と、台所に降りていくと、大抵その日のスープが温められている。弟はダイニングテーブルで書き物をしていて、わたしが起きてくると朝ごはんの支度を始める。目玉焼きやソーセージを焼くのは弟、トーストとコーヒーを準備するのはわたし。そこにどちらかが作りおきした常備菜が加わる。食べた後は手の空いてる方が片付けをし、それぞれ仕事に向かう。

帰宅して、夜。

家がとても冷えるので、わたしたちは夜もやっぱり台所にいる。お湯を沸かしたり、スープを炊いたりすると少し暖かい。ダイニングテーブルで何かしら作業しながら、日々のこまごました出来事や関心事を話したり、お茶やお酒を飲んだり、料理の品評会をしたりする。

(中略)

あまりに台所中心生活なので、最近はなんだか、家に帰るというより、台所に帰っている感じ。

(『台所中心』2017年11月27日)

だが彼女たちの「家庭未満」が演劇のように見えるのは、特別なことではない。それはかつて自明のものとして信じてられてきた家庭のありよう ── お父さん・お母さん・子どもが二人、といった「いわゆる一般的な」家庭 ── もまた、演じられた役割や小道具、舞台によって成立していることをあぶり出しているだけだ。中田さん姉弟も、それを自覚している。

家をわざとヘンテコに改造して、妙な組み合わせで暮らすことで、世間から浮いた場所になっているのかもしれない。東京のスピードはちっとも届かず、父の田舎ほどの共同体感もなく、かといって郊外の主役である家庭生活はここに無い。

(中略)

ときどき、20代の頃の“穏やかな家庭の日々”を思い出す。あの日々を続けていたら、わたしは今頃「母親」になっていたのだろうか。まったく想像がつかない。今からするとあの日々がドラマで、あの頃からすると今の暮らしがドラマだ。

（中略）

居間に降りると弟が映画「晩春」を見ていた。面白そうだったのでつられて一緒に見た。面白かった。

「小津ってさ、こんなに家族の物語ばかり撮っているのに、生涯家庭は持たなかったらしいよ」と、弟が言う。

物語の中で物語を見る。なんだかそんな感じがした。

（『ドラマ』2018年2月3日）

中田さんたち姉弟は、血縁的にも戸籍上も「家族」なので、これが「家庭」であってもおかしくはない。だが実際にふたりの暮らしを指して「家庭」と呼ぶ人は多くはないだろう。なぜなら、登場人物の構成と舞台設定が「普通じゃない」からだ。

一方で、血縁や戸籍の関わりがない人たち同士で構成される「オルタナティブな家族」の形が「いわゆる一般的な」夫婦関係や親子関係をトレースしたものになったとしても、そもそも「家庭」が演劇だと考えれば、しっくり来る。

「俺、職場でさすがに言ってないもん。亡くなったばーちゃんの家で姉と暮らしてるなんて」
「え、そうなの？」
「そう、『実家で暮らしてる』って濁してる。だってどんな物語的設定だよって思うよ、普通は」
「なるほど」

でも楽だよね？ と問うと「楽」と、即答。家賃はかからず、家事やリスクは分担、プライバシーには踏み込まない。生活が安定して、新しいことに取り組む余裕も生まれた。

（中略）

そういう生き方に納得し、なんだかんだマイペースに楽しく暮らしてる時点で、わたし（たち）は、やっぱり今日もプカプカと浮いている。
ああ気楽。そして孤独。

（『プカプカ浮く』2018年2月24日）

「家庭」から解放される アジールとしての「家」

世間から浮いた「家」に、寂しさを抱えた人たちが避難所のように集まってくる。それは中田さん姉弟の「家」が、幸福という呪いから自由になれるアジール（無縁所）だからではないか。

だから、やっぱりこれは家庭ではないのだろう。あくまで「家」なのだ。自分たちが特殊解であることを自覚しているから、たぶん「新しい家庭像／幸福像を提示しよう」なんて大それたことも考えていない。ただ「家庭の幸福」という呪いから逃れるための切実な抵抗であり、「解体」なのだ。

だがそんな「幸福（像）の解体現場」にも、ふいに「幸せ」は訪れる。

台所からは、弟がお湯を沸かしつつ、何やらパソコンでタイピングしている音が聞こえてくる。

（中略）

外はまだ風が強い。家の中は少し暖かい。自分以外の人間がいる気配がして、安心する。大昔からあるソファは体に馴染んで心地よく、読み終えた短篇小説はとても面白かった。眠気がやってくる。寝てしまいそう。

そのとき、ふと「幸せだなぁ」と思った。

驚いた。「快適」とか「楽しい」とか「充実している」は感じてきたけど、手放しの「幸せ」は、何年もどこかに置き忘れていた。忘れていたことすら、そのときまで自覚がなかった。驚いた。この唐突な幸福感は何だろう。

そんな姉の困惑をよそに、台所にこもっていた弟が番茶を淹れてくれた。暖かい。美味しい。色々と保留にして、ふたたびソファに身を沈めた。

（『振り子』2017年11月27日）

かつてあった「幸福 “像”」はひとしきり解体され、家族とその容れ物としての家とを結びつける正しい「苗字」も、周囲の人にとって受け入れやすい「物語の設定」もそこにはない。「家庭」を構成していた要素が分解され散らばったままの空白から、ふと静かな水音のように湧き出してくる「幸福 “感”」。この安らぎは何だろう。

ここまで中田さんのウェブサイト『家を継ぎ接ぐ』を読み解きながら、ひたすら彼女の「解体の手つき」を観察・考察してきた。

本稿の冒頭で予告した通り、ここで中田さんご本人にご登場いただく。彼女には「家庭／家族の幸福像＝呪いを解体すること」というお題を伝えた上で、特に内容の打合せはせず、自由に書いていただいた。

彼女のエッセイの後で再び筆者が本稿全体のテーマについて考察を加え、まとめとする。

大きな冷蔵庫

2018.03.04
中田一会

「冷蔵庫、やっぱり小さいんじゃない？ 買い換える？」

数年前のとある休日。おかずを詰めたタッパーと食材を入れたら冷蔵庫がパンパンになった。ひとり暮らし用137リットルの冷蔵庫。ふたり暮らしには確かに足りない。L字型のひろびろとしたキッチンで、小さな冷蔵庫は浮いていた。

「うーん、でもまだしばらくこれでいい。大きな冷蔵庫、こわいの。工夫して使うよ」
「今でも？」
「うん」
「そうか」

隣の夫が寂しそうに肩を落とす。彼はわたしが冷蔵庫を大きくしたがらない理由を知っている。「どこにも行けなくなりそうで、こわい」。そんなことを言う妻に寄り添ってくれる、優しい人だった。

当時わたしは27歳で、夫は39歳。東京・世田谷の4LDKで暮らしていて、ベッド以外の大きな家財は持っていなかった。人生の機動力を落としたり、選択肢を狭めたりするのがいやだったから。いつでもどこへでも、ぱっと動ける状態でいたい。何かに縛られるのは、こわい。そんなわたしの言い分を（完璧な共感はせずとも）理解してくれる男性は珍しい。だから彼とは一緒にいられたし、だからこそ苦しめてしまった。

自分の「結婚観」に偏りがあるらしいと気づいたのは、結婚してからのことだった。というかそもそも「結婚観」らしい「結婚観」を持っていなかった。何歳までに結婚したいとか、何人子どもが欲しいとか、どんな家で、どんな男性と、どんな挙式を……というイメージを一度も抱いたことがなかったのだ。かといって「結婚したくない」と強く思ったこともない。たまたま好きな人に巡り会って、お互いのことが理解できて、一緒にいることに安心できて、その関係を公式なものにしたかったから、わたしたちは入籍した。

結婚にまつわる「こわいもの」は他にも沢山あった。例えば、貯金が一緒になること、何十年も変形しないプラチナリング、変わってしまう名前、そして「お母さん」になること。

と、ここまで書いてみて、今でも冷や汗が出る。こんなことを言葉にして、わたしは世の中から居場所を無くさないだろうか。周囲の人に嫌われないだろうか。泣きそうなほど不安だ。結婚しておきながら、「家庭」がこわいだなんて、そうそう口にできない。何より「こわい」と思う自分がおそらく少数派だということがこわい。その「こわさ」の正体に目を向けられるようになったのは、本当に最近のことだ。

そんなわたしは現在33歳。バツイチ独身である。

元夫との話し合いの末、31歳で離婚が成立した瞬間、全身から力が抜けた。果てしない罪悪感と開放感、寂しさ、喜び。たくさんの感情がわたしの中から飛び出してきて、最後にそっと現れたのは「わたし“は”離婚できた」という安堵感だった。そのとき、気づいてしまった。自分がある種、呪われていたことに。

わたしの両親は、ちょっと個性的ではあるものの、一生懸命家族のことを考え、働いてきた人たちだ。沢山の愛情と知恵を授けてくれた。だけど、幼い頃からわたしは、母の「“お母さん”ではない自分」への未練に気づいていた。多才な彼女は、わたしを授かったことでいくつかの夢を諦め、体調も崩した。ときおり家の奥でこぼすため息は、子どもの目にも重く映った。彼女は、わたしよりもずっと自由な魂を持っていたのに、それを「家庭」という約束と責任の裏にギュウっと仕舞い込んでいたように思う。わたしが幼稚園生の頃、「将来の夢はお嫁さん」と答えた他の女の子を見て残念そうにし、わたしが高校生の頃、化粧をするようになった娘を見て同じ視線を向けた。

わたしは、彼女のことが大好きだったし、同じぐらい苦手だった。彼女のようになりたかったし、彼女のようになりたくなかった。

「俺たちが子どもを持つことと、君のお母さんの話は、関係ないよね？」

苛立った前夫の声が忘れられない。結婚していた当時、子どもを持つ／持たないで、話し合ったとき、わたしは母の話を引き合いに出して「こわさ」を伝えようと試みた。試みたけれど、彼を困惑させるだけに終わった。関係は、ある。わたしはそう信じていた。母と同様に沢山のやりたいことを抱えていたから、自分が母のように振る舞ってしまう不安で一杯だった。人の親になる自信がなかった。

「……これって呪いかな？」
「そうだねぇ」

2018年1月2日。わたしと友人は、女ふたりでおせちと日本酒を囲み、お互いの家族にまつわるエピソードを交換していた。場所は千葉県の「家」。母の生家で、3ヶ月前まで空家だった古い一軒家だ。

前年の9月、東京都内の部屋を引き払い、「家」に移り住んだ。その翌々月には、仕事の事情で3歳年下の弟も越してきて、わが家は姉弟ふたりのシェアハウス状態に。さらには友人や同僚、親戚が時々やってきて、家の改造を手伝ってくれたり、芋煮会を開催したり、人生相談していったり……と様々なことが起きている。

家族のルーツが詰まった家を「継ぎ接ぎ」しながら、自分自身のゆがみを受け入れ、人生を見つめなおすと決めた。その覚悟を込めて立ち上げたのが、『家を継ぎ接ぐ』というウェブサイトだ。

サイトでは、ひとりの30代女性として、家と暮らしにまつわる思考や、日常の出来事、家から読み解く家族史を綴っている。日記ではなく、1記事1テーマの「コラム」として他者と共有可能な言葉に練り上げるのが私的ルールだ。「わたし」のことを書きながら、「わたしたち」のことを探りたい。漠然とした「こわさ」を因数分解したいと考えた。

8ヶ月で50記事。想定よりも早いペースで筆は進み、記事を読んだ人からときどき声をかけられるようになった。そして実際に『家を継ぎ接ぐ』を読んで我が家に来る人たちは、焚き火を囲むように家や家族のことを真ん中に置き、話しはじめる。それもワイワイと、楽しそうに。一人ひとりが抱える人生観／家族観／結婚観が差し出され、語り合う肴になる。わたしはそのことにとても救われている。

今、わたしの家の冷蔵庫はとても大きい。

祖母が遺した家族用のものを引き継いだからだ。401リットル、容量たっぷり。いくらでも入る。冷蔵庫の中には、家族ではない人と共有する食材やお酒が詰まっている。こんな暮らし方があったのか、と、自分でも驚く。もちろん、寂しさは変わらない。家族を持つ「こわさ」も残っている。

だけど、人はそれぞれ異なる形でズレていて、ズレたままでも一緒に時を過ごせる。そんなささやかなことに、とても遠回りして気づいた。わたしは、ぽろりぽろりとこぼれる自分の言葉を「継ぎ接ぎ」しながら、他者と生きていく新しい道を整えているのかもしれない。

※3：『愛蔵版 ハッピィ・ハウス』主婦と生活社、2001年。漫画は1990～1992年にかけて連載またはコミックス発行時に描き下ろしされた。あとがきは1992年1月初版発行のコミックスより抄録されたもの。（本書より）

おわりに── 解体されたあとに残るもの

岡崎京子が解体しようとした「家庭」

岡崎京子は1990～1992年にかけて発表した『ハッピィ・ハウス』で、「家（ハウス）」によって家族や家庭を解体する物語を描いてみせた。

テレビ局プロデューサーの父と有名女優の母、兄という何不自由ない家庭で暮らしていた主人公のるみ子（13歳）。ところがある日、父が突然「しばらくの間、父さんは家族をやめたいんだ」という宣言と共に家を出ていってしまう。

だが元々てんでバラバラ好き勝手に暮らし、離散家族のようなものだった一家に対して、るみ子は「鈴木家のっとり大計画」を決行する。家から母と兄を締め出して一人暮らしを始め、自宅でラブホテル経営に乗り出したり、以前この家で雇われていた家政婦・シゲさん、中学のかっこいい先輩・マツダくんと「ずっと一緒に暮らしている家族のようにおだやかな食事」をしたりしながら、家族以外のさまざまな人たちと関係性を結んでいく。

岡崎京子はあとがきで、こう書いている。

「家族」という言葉の強制する、強引な“ぬくぬくとしたあたたかいしあわせ”のイメエジ。
そのイメエジが、サイズの合わない靴のように、私にはきゅうくつでした。（中略）

現代では、私の個人的なじたばたとは別の所で、「家庭」や「家族」じたいが、いつの間にか変容してしまったのも確かな事です。とらえ所無く、でも、実はある種の蜂に寄生された蝶のように、すっかりと。

奇妙な家無き子（家はあっても家は無し）、おかどちがいな孤児（親はいても親は無し）として生きる事は今、誰もが余儀無くされている事かも知れません。でも魔法を手に入れるチャンスは充分あります。いくら負けが込んでいても。いつか。そして裸足で歩き出しましょう。サイズの合わない靴でヨタヨタ歩くより、裸足で歩くことを。熱砂の中を、裸足で進んでいった無謀なディートリッヒのように。

（岡崎京子『ハッピィ・ハウス』1992年1月※3）

四半世紀前の呪い

25年ほど前に書かれたものとは思えないほど、現代的な戸惑いをぴたりと言い当てているとは感じないだろうか。だからといって私たち（と括ってよい対象は、かなり限られているのかもしれない。ちなみに「るみ子」が現実世界で生きていたら筆者とほぼ同い年だ。中田さんはその3歳下）がこの四半世紀、同じ戸惑いの中で足踏みをしていたわけではない。

もちろんいつの時代も、人々は前時代の幸福像という呪いと戦ってきた。だが一方で幸福像の賞味期限が短くなり、更新されるスピードがどんどん早まっているようにも思える。それはすぐに悪くなり、呪いの腐臭を放ち始める。そして新しい、まだ甘い香りのする別の呪いに取って代わられる。

「家」にこだわることで家族を、家庭を解体しようとした13歳の「るみ子」が、あるいは岡崎京子自身のあとがきが、筆者には『家を継ぎ接ぐ』に重なって見える。だが、その「解体の手つき」は、やはり25年の間にかなり前進したように思うのだ。漫画のストーリーと現実世界とを比べるのもおかしいかもしれないが、筆者には『家を継ぎ接ぐ』の方が（もちろん）プラクティカルでありながら、かなりパンクに見える。

90年代の宿題と、平成という夏休み

『ハッピィ・ハウス』の結末では、結局のところ父も母も兄も家に戻ってきて、鈴木家は再び元の姿を取り戻す。

るみ子は「まあどうにか今のとこ鈴木は機能していて／あたしには別に不満はない／別に何もキタイしてないから／すてきな我が家　楽しい我が家／ドアを開ければステキなフロア／食べものいっぱいのキッチン　あったかいスープ／テーブルには花／ピカピカのバスは泡いっぱい夢いっぱい／その後ふかふかの

※4：初出は1993 ～1994年にかけて『月刊CUTIE』にて連載された。

ベッドにもぐりこんで／しかもパパとママまで付いていて　あたしはぬくぬく幸せでいっぱい」と精一杯のアイロニーをかます。だがその結末は2018年のいま読むと、あっけなく、味気ない。新しい呪いを発明するどころか、古い呪いに立ち戻ってしまっている。13歳のるみ子は醒めていて、煙草は吸ってもコドモのままで、結局のところ家族どころか自分の生活すら変えられない。今の十代の若者たちは、きっともっとタフで、軽やかだろう。

それとも私たちはあの頃の自分たち＝「るみ子」に、復讐されているのだろうか。90年代（つまり平成の初期）に仕上げられなかった宿題を、大人になった今やらされているのだろうか。失われた30年は、壮大な夏休みだったのだろうか。もうじき夏休みが終わる。

ところで本報告書の発行と前後して、岡崎京子の代表作『リバーズ・エッジ』※4も映画化された。連載から25年経った今、この作品が映画化されるとは、当時まだ生まれてもいなかった若い人たちによって演じられ、観られるとはどういうことか。やはりこれも90年代の宿題なのか。

2017年に発行され話題になった『ルポ 川崎』（磯部涼著／株式会社サイゾー）の中でも『リバーズ・エッジ』（著者のいう通り、その地名は確かにriver's edgeと訳せないこともない）が登場する。この作品は平成という時代を測る物差し、“あの場所”から今、自分たちがどのくらいの距離にいるのか測るスケールのような役割を果たしているようにも思える。ちなみに著者である音楽ライター・磯部涼は1978年生まれ、「るみ子」の1歳上だ。

25年後の「るみ子」として

話を『ハッピィ・ハウス』と『家を継ぎ接ぐ』に戻そう。これは単なる頭の中の実験に過ぎないけれど ── 仮に、中田さんの『家を継ぎ接ぐ』を、大人になった「るみ子」の企てだと想像してみたらどうだろう。もちろん両者の家庭環境は大きく違う。だが世間の人たちが「そっとしておいてほしい」と思うものまで解体しすぎる明晰さと正直さは、驚くほど似ている。「るみ子」は家庭があっても、むしろ家庭があるからこそ埋まらない寂しさを暴くために、家族を締め出して一人暮らしを試み、同じような寂しさを抱えたシゲさんやマツダくんとつながった。だが結局は、寂しいままでいい、と現状を肯定してしまった。さらに『ハッピィ・ハウス』は、マツダくんと「いつか二人で幸せな家庭」をつくる未来を匂わせる後日譚で終わっている。それは明るい未来を予感させるようでいて、実は両親から受け継いだ「呪い」を再生産する未来を予言しているようにも見える。

一方、中田さんは『寂しさをどうにかする』（2017年8月31日）ことを諦めてはいない。まだエンディングが来ていないので、この後の展開はわからない。だが、ひとつの方向性を垣間見る出来事があったので、最後に記しておきたいと思う。

死にゆく「家」を看取る

実は筆者も、中田さんの「家」にエスケープしに行ったことがある。弟さんはモンゴル旅行中だったこともあり、女ふたり夜も更けるまで喋り倒して、その日は泊めてもらうことになった。お借りした浴室には立方体に近いステンレスの深い浴槽。昭和感溢れるタイルの意匠など、自分の祖父母の家を彷彿とさせる懐かしいお風呂だった。

借りたパジャマで風呂上がりにくつろいでいると、中田さんがこう言った。

「こんなこと言うのアレかもしれないけど……うちのおばあちゃん、あの浴槽で亡くなったんです」

正直ちょっとびっくりした。よく考えれば、生きている人が住んでいたのだから、そこで亡くなっても不思議はない。でも自分が家という場所について、「そこで人が死ぬ」という場面をリアルに想定できていなかったことに気がついた。だがもっとびっくりしたのは、それを私に告げる中田さんと、聞いた時に自分が感じた「温かさ」に対してだった。

おばあちゃんが亡くなった浴槽。そこに、それまで実感のな

かった中田さんの祖母の存在を、その女性がたしかにこの家で生きていたのだ、という手触りのようなものを感じた。友人の肉親だからだろうか。怖いといった感情は起こらず、むしろ「そんなお風呂を家族ではない私に使わせてくれるなんて、ありがとう」とも思った（これは、ひょっとしたら一般的な感覚ではないかもしれない）。

だが、そこまで考えて気がついた。そこは「亡き祖父母の家」というだけではなくて、「おばあちゃんが亡くなった場所」でもあるのだ。その場所を、改装工事どころか表札を外すことさえせず、わりとそのままで暮らし始めるというのは、どんな気持ちだろう。

いつか中田さんが「家を看取る」という言葉を口にしていた。『ハッピィ・ハウス』で「るみ子」が立てこもる家は、ピカピカでおしゃれなファミリー向けマンションだ。一方、中田さんが引越したのは築50年の木造2階建て。「あの家で東京オリンピックをみんなで観戦する」という母親の希望があるから2020年までは残りそうだが、一方で中田さんも弟さんも今の暮らしは「2020年が目処かな」と考えている。

彼女たちは自然と朽ちていく「家」を積極的に再生することはない。枯れ木に棲み着き地面に返す微生物のように、ただそこで日々、寝起きし煮炊きをし、庭木をほどほどに構いながら「家」と共に生きる。長年閉め切られていた雨戸を開け、窓という窓から風を通すように、日常の営みを通じて「家」という閉じられた場をこじ開け、「庭」のように開く。そうやって、かつてあった「家・庭」を解体していく。そうしてやがて「家」の最期を看取ったら、彼女たち／私たちの呪いもついに解けるのだろうか？私は、きっと彼女たちの試みは「るみ子」の企てのように「なかったこと」にはされないと思う。

「寂しさ」から次の住まいを考える

住まいづくりに関していえば、新しい幸福像に合わせた新しい「家」をつくろうとする前に、かつての幸福像を反映したかつての「家」と丹念に向き合い、「呪われている」部分からひとつずつ解体する。そんな風に始めてはどうか。

そのとき、頼りになるのは「憧れのライフスタイル」などではなく、やはり「寂しさ」という感覚なのだと思う。「幸福という呪い」が構造的な問題である以上、これからも呪いは更新され再生産され続けるだろう。だが自分の内側にある「寂しい」という微かな声を聞き逃さなければ、呪いに囚われていると気がつくことができる。いま何が寂しくて、どうすれば寂しくないのか。そう問うことから、次の住まい方のビジョンが、そして「幸福“像”」ではない、たしかな「幸福“感”」がやってくる気がする。

最後に、自分の人生かけて書き綴っているコラムを取材対象として扱うことを快諾してくれたばかりか、さらに率直なエッセイを書き下ろしてくれた中田さん、共に「家」で暮らしているがためにこの論考に思い切り巻き込んでしまった弟さん、おふたりのご家族・ご親族の皆さんに心から御礼を申し上げたい。

「呪い」などと不吉な言葉を使ってしまったが、中田さんは明るく聡明な女性で、彼女の周りにこれだけ多くの人が集まる理由は、ご本人に会えばよくわかる。そして「家」にエスケープさせてもらった一日は本当に居心地のいい、心安らぐ時間だった。読者の皆さんもぜひウェブサイト『家を継ぎ接ぐ（https://tghgie.wordpress.com/）』を訪れ、彼女の言葉に触れてみてほしい。

写真／『家を継ぎ接ぐ』より

参考文献：椹木野衣『平坦な戦場でぼくらが生き延びること ── 岡崎京子論』筑摩書房、2000年

PROFILE

石神夏希（いしがみ・なつき）1999年よりペピン結構設計を中心に劇作家として活動。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了。近年は横浜を拠点に国内各地や海外に滞在し、横浜・メルボルン・マニラで創作・上演した『ギブ・ミー・チョコレート！』（2015-2017）をはじめ都市やコミュニティを素材にサイトスペシフィックな演劇やアートプロジェクトを手がける。また『Sensuous City［官能都市］』（HOME'S 総研, 2015）はじめ社会や都市に関するリサーチ・企画、NPO 法人『場所と物語』理事長、遊休不動産を活用したクリエイティブ拠点『The CAVE』の立ち上げなど、空間や都市に関するさまざまなプロジェクトに携わる。